



王女ソフィア
の野望



kaji0213

第一話「騎士アレスの転落人生」

「があああ。しまったああああ」

騎士団長アレスは人生最大の失敗をおかしてしまった。国王の大事にしていた壺を副団長ブルーノとキャッチボールをしている際に割ってしまったのだ。

「見たぞ。見たぞ。見たぞおお。アレスうう。とんでもないことやってしまったな」

「こ。これはブルーノ、頼む。黙っていてくれ。うまくセメダインで止めればなんとかなるかもしれん」

「国王様あああ。アレスが壺を割ってしまいましたよおお！！」

「ブルーノおおお！ 死んでしまえええええ！！」

ブルーノはアレスの言うことは聞かずに早速言いふらしに行ってしまった。

「俺、終わったな」

アレスは粉々になった壺を見つめて崩れ落ちた。調子に乗ってカーブなど投げるものでは無いと反省したが、それも今となってはどうしようも無いことだった。

アレスはつい最近、念願の第一師団団長に任命されたばかりだった。史上最年少のスピード出世であったが、国王は、自分の壺を割られたことに大層お怒りの様子で、アレスは第一師団から異動されることになった。

アレスの新たなる配属先は第七十八師団。一応団長という職はもらえたが団員はアレスのみだ。師団自体が第五までしかないので、事実上のやっかい払いだった。任務は王女様の護衛。王国最強の騎士と言われているアレスにとっては身に余る任務である。

バルガス大陸の中央部に位置するストレガ王国。ロゼッタ、クロスティーニ、マルサラ、アマ一口と囲まれていることからかつては激しい戦乱のただ中にいたが、現王ジェラルドの時代より中立の立場を取るようになってからは、一応の平穏を取り戻していた。

アレスはストレガ王国の騎士団に所属し、壺を割るまでは第一師団団長を務めていた。王国一の腕前と言われ、時期軍団長候補とも言われていたがあっけなく失脚し、第一師団からも追い出されることになった。アレスは思った。テンションが上がってキャッチボールなどするべきでは無いと……。

アレスは執事のオットーに伴われ、王女様に挨拶に行くところだった。

「アレス。くれぐれも王女様に失礼のないようにな」

「わかりましたよ。教官」

「教官は止める。今の私は執事だ。気さくにオットーさんと呼べ」

アレスは心の中で呼べるかよと舌打ちをした。この執事のオットーは元アレスの教官であった。かつては鬼のオットーとして恐れられていたが、何年か前に引退して今は王女様付きの執事をやっていた。アレスは昔のイメージが強すぎて、今のオットーに違和感を持っていた。

「ソフィア様。オットーです。新しい護衛の騎士を連れてまいりました」

「……」

「ソフィア様。聞こえておりますか？」

「……」

ottoがドアをノックしたが返事は返って来なかった。

「いないのじゃないのか？」

「いや。そんなはずは無い。ソフィア様は滅多に部屋からは出ない。恐らくは面倒だから無視しているのだろう」

「ソフィア様。すぐ終わりますので出てきてはくれませんか？」

「……なに」

しばらくしてドアが少しだけ空いて中から声が聞こえてきた。中が暗くて王女様はよく見えなかった。王女様はひどく不機嫌な声だった。

「ソフィア様。申し訳ございません。新しい騎士が護衛に付きますので挨拶に参りました」

「……そう」

「ほら。挨拶せんか」

「私、第七十八師団団長、アレスと申します。この度は――」
ボタン。

アレスの挨拶の途中だったが、ドアが勢い良く閉められた。アレスは途中までしか挨拶ができず非常に不快に感じた。

「分かったから、下がってちょうだい。今は気分が悪いの」

「そうですか。それではよろしくお願いします」

「行くぞ」

「は。はあ」

アレスはottoに引っ張られるようにして、ソフィアの部屋の前から立ち去った。結局、王女様の姿を見ることはできなかった。

「ソフィア様は、いつもあんなのか」

「アレス。口を慎めよ。お前の首などすぐに飛んでしまうのだからな」

「はい。はい。分かりましたよ。それで俺はどうすればいいんだ」

「そうだな。おお丁度いい。マキナ、城を案内してくれないか。わしはちょっとやることがあつてな」

アレスの背後にメイドが立っていた。今まで背後を取られたことが無いアレスは驚いた。

「この城のメイドのマキナです。よろしく」

「ああ。俺はアレスだ。よろしくな」

丁寧にマキナは礼をした。アレスはマキナのことを近づきがたい印象をうけた。メイドのマキナは可愛らしい外見をしている。ただ、とても冷たい目をしているのでそれが、異様な感じがする。それが近づきがたい印象を受けるのかも知れないとアレスは考えていた。

「それでは頼んだぞ。マキナ」

「いってらっしゃいませ」

アレスがマキナのことを考えていると、ottoはアレスとマキナを残して、どこかに行って

しまった。

「……」

「何だ」

マキナはアレスを冷たい目で黙って見つめていた。アレスはなぜかとても居心地の悪い感じがした。仕方が無いのでアレスはマキナのふりふりのスカートを見つめることにした。あまり見つめているのも悪いのでアレスが何か喋ろうとすると、いきなりマキナはスカートの中からナイフを取り出してアレスに斬りかかった。

「く……」

予想外の攻撃だったがアレスは上手くかわして、マキナのナイフを握っていた腕を掴んだ。予想外の攻撃にも驚いたが、その素早い動きにアレスは驚愕した。アレスはふりふりを見ていて助かったと思った。ふりふりを見ていなかったら命を落とす所だった。

「何をする」

「あなたを見ていたらつい、吸い込まれるように斬りつけてしまいました」

「……お前は誰にでもつい、斬りつけるのか」

「いえ。初めてです。ぼ」

マキナは顔を赤らめて、アレスから視線を逸らした。アレスはマキナの真意が分からず困惑していた。昨今のメイドはつい斬りつける特訓でもしているのだろうか。

「何のつもりだ。訳を言え」

「訳も何もございません。そこにアレス様がいたので斬りつけてしまいました。申し訳ございません」

マキナはまるでそこに山があるから登るといったような口ぶりで答えた。そんな日常的に斬りつけられたらたまらない。第一、なぜメイドがナイフなど所持しているのだ。

「このメイドはナイフを所持しているのか。変わっているな」

「そんな訳ないじゃないですか。私だけです。どこの世界にナイフを所持しているメイドなど存在するのですか」

アレスはじゃあお前は何なんだよと突っ込みたかったが、何となくこのメイドに何を言っても無駄なような気がしたので止めておいた。とりあえずあまり関わるのはよそうとアレスは心の中で思った。

「無駄でございますよ。アレス様。私はソフィア様の専属メイドで、アレス様のお世話係も兼任しております。関わらないようにするのは少々難しいかと」

「お前。なぜ俺の考えていることが分かる」

アレスは考えていることが読まれて、狼狽した。アレスはこのままではメイドによからぬことを考えているがばれてしまうと思い、一心不乱に円周率を思い出すことにした。

「さあ。なぜでしょう。なぜかアレス様の考えていることはわかるのです。それよりもお城の中を案内いたします。では参りましょう」

アレスはマキナに気持ち悪さを感じながらも城を案内してもらうことにした。ちなみに円周率は十桁までしか思い出さなかった。

「ここが食堂です。食事の時間は決まっておりますので遅れないようにしてください」

「……」

「ここは国王様の私室です。テンションが上がって騒がないようにお願いします」

「……」

「ここはトイレです。紙は五センチまでと決まっておりますので、それ以上はご遠慮ください。どうしても間に合わない場合は、オットーさんと相談してください」

マキナに案内されながらアレスは、マキナの様子を観察していた。マキナは恐ろしく隙が無かった。アレスはどうにかして背中にごみをいれてやろうとしたが、ついにその機会は無かった。

「ここはアレス様のお部屋です。どうぞ」

「……」

アレスの部屋は一人で使うには広すぎる部屋だった。部屋が三つほどあり、トイレに風呂まで付いていた。いくら騎士団長といえどもこれは破格の待遇と言わざるを得ない。それに妙なメイドまで付いている。アレスはおかしいと思った。

「これが燃えるごみ、燃えないごみ、ペットボトルを捨てる際はふたを取って捨ててください。洗濯物はこのかごに入れてください。後で回収に参ります。それで――」

「おい！ お前は何者だ」

「……私はただのメイドですが、何をおっしゃっているのか。意味が分からないのですが、ソフィア様の護衛になられて妙にテンションが上がっているのは、分かりますが訳のわからないことは仰らないでいただけますか」

「訳のわからないのは貴様だ。俺には分かるぞ。お前がただのメイドでは無いことが。誰の差し金だ」

アレスは思わず、腰に差していた剣を抜いて、マキナに突きつけた。マキナは全く動揺せず、冷たい目でアレスを見つめていた。しばらく無言で見つめ合うとマキナは何事も無いかのよう再び説明を開始した。

「それでシーツは一週間に一回変えますので、若いからと言ってあまり淫らに汚さようにお願いいたします。それと――」

「貴様、俺の質問に答えろ」

「……」

「な！！」

マキナはスカートから何かを取り出すと素早い動きで俺の口にねじ込んできた。それはみずみずしいきゅうりだった。そのきゅうりはとてもとてもおいしかった。

「びっくりした。びっくりしたでしょ。私、すぐお腹が空くからいつもきゅうりを持って歩いているんですよ。いざとなったら武器にもなりますしね。朝、厨房でこっそり十本くらいもらってくるんですよ」

「も……ぼりぼり……もういい。さっさ……ぼりぼり…とどこかへ行け」

「はい♪ ではきゅうりが恋しくなったら私を呼んでくださいね。ごゆっくり～」

一点して、眩しいくらい笑顔を見せてマキナは、部屋から出て行った。アレスはしばらく立ち尽くしていたが、ものすごい疲労を感じて、ベッドに倒れた。

(いったい、何者なんだ。あいつは。全く動きが見えなかった。騎士団の中でもあれだけの動きをする人間はいない)

アレスはベッドの中で考えを巡らせていたが、謎は深まるばかりだった。

第二話「出てこい。ソフィア。俺はここだああああ！！」

アレスは翌日、ソフィアの部屋のドアの前にいた。

「とりあえずソフィア様と仲良くならなければ、護衛にも何もならないだろ」

アレスは何度か、ドアをノックしようとしたが、さすがに王女の部屋のドアをノックするのをためらっていた。何度かノックまでの動作まで行ったのだが、やりかけて止める動作を何度か繰り返していた。

「これでは埒があかん。駄目もとだ。とりあえずノックしてみよう」

コンコン。

「……」

アレスはドアをノックした。しばらく待っていたがドアが開くことはなかった。

「いないのか。はたまた無視しているのかどっちなんだ」

アレスはドアの前で考えていたが一向に考えがまとまらなかった。

「仕方がない。もう一度、ノックしてみよう。ソフィア様！ 申し訳ございません。出てきてくれませんか！」

ドンドンドンドン。

アレスは少し強めにドアを叩き、声を出して中にいるはずのソフィアに向かって叫んだ。しばらく待ったが、一向に返事が無かった。アレスが諦めようとしたとき、中から声が聞こえた。

「私は今、忙しい後にしてくれ」

「は、はい！ また、出直します」

アレスは声が返ってくるとは思わなかったので驚いていた。思わずソフィアの部屋から走って逃げていた。

「はあ。はあ。びっくりしたな。まさか、声が返ってくるとは」

「アレス様、朝から変態行為にご熱心ですね」

アレスが振り返ると、メイドのマキナが背後に立っていた。一度ならず、二度もアレスは背後を取られて騎士の面目が丸つぶれであった。

「マキナか。どこから沸いて出た」

「沸いて出てきたのはあなたですよ。私が優雅に掃除をしている所に、変態が急に走って来たのですから。燃えるゴミの日に捨てますよ」

「誰が変態だ。貴様、メイドの分際で口に気を付けろよ」

アレスは妙に頭に来てマキナを権力でねじ伏せようとした。

「口に気を付けるのは貴方のほうですよ。あなたがどれだけ偉いか知りませんが、ここでそんなことが通用すると思っていますか？」

マキナは喋りながら背中から剣を取り出した。それほど長い剣では無いが、背があまり高くないマキナにしては大振りの剣だった。

(背中に剣って意味がわからんぞ。だいたいあんな長い剣どこに隠していたんだ)

「お前、何のつもりだ。騎士に向けて剣を取り出すなど死にたいのか」

「死ぬのはあなたの方ですよ。はあああああ」

マキナは剣を両手に握り、上段に構えるとアレスに向かって駆け出した。それを見て慌ててアレスも剣を取り出し、構えた。

ガギィィン。

アレスはマキナの剣を受けた。マキナはとても女とは思えないほどの力でアレスを壁際まで追い込んだ。

(こいつ、全く何者なんだ)

「昨日は遅れを取りましたけども、今日はそうはいきませんよ」

「お前、どうかしてるぞ。急に斬りつけてくるなんてよ」

「あなたを見ていると、どうしても我慢できないんですよ！」

アレスはマキナを押し返して、距離を取った。マキナは少々バランスを崩したが、持ち直して、再びアレスに斬りかかる。アレスはマキナの力を警戒して、剣を受けずに避ける。マキナは執拗にアレスに向けて、剣を振り下ろす。アレスは避けられるものは避けて、避けられないものは剣で受け流した。

(相当訓練を受けているようだが、俺の敵ではないが、ただメイド世界選手権があったら優勝するかもしれない。それほどの実力だ。しかもあの構えは見覚えがあるぞ)

「止めないか。マキナ！ アレス！」

執事のオットーがアレス達に向かって走ってくる。さすがのマキナもオットーに見つかって、戦いを止めて慌てて剣を背中に隠そうとする。アレスは心の中でもう遅いだと突っ込んでいた。

「マキナ！ アレス！ これはどういうことだ」

「どうもこうもこの女が急に斬りかかってきやがって。そうだろ？ マキナ……っっていないし！」

マキナはいつの間にかどこかに消えていた。お金を払いたいほどの逃げ足の速さだった。

「まあ、いい。マキナには私から後で言うておく」

「それはありがたい。頼みますよ。マジで」

「アレス。メイドと戯れている場合ではないぞ。今連絡が来たが、ロゼットとアマー口が国境沿いで小競り合いをしているらしい。ストレガもいくら中立だからと言っても安心はできないぞ」

アレスは別にメイドと戯れたくて戯れている訳ではないのだが、反論してムキになっていると思われたくは無かったので、黙っていた。それよりもロゼットとアマー口の小競り合いだ。ストレガが中立になる前はよく各地で小競り合いがあったと聞いていたが、近年はそんなことは無かった。

「それで国王はどうするつもりなのですか？」

「国王は体調が思わしくないので、クレア大臣がストレガ国境付近を固めるために第一師団を出した」

「国王は体調が悪いのですか？」

「大事には至らないようだが、なにぶんご高齢だ。クレア大臣もいらっしゃるので任せることに

したらしい」

「クレア大臣ですか」

クレア大臣はソフィア様の姉にあたる人物だが、その頭の良さをかわれて今は大臣の役職に付いている。次期、王位第一候補とも言われ、騎士団はクレア派の人間が多い。現騎士団軍団長アルフレドはその筆頭だ。ただ、一点だけクレア大臣には欠点がある。それは後ほど、語ることにしよう。

「どうした……。急に黙って」

「いいえ。少し考え事をしていました」

「とにかく！ 国外情勢が思わしくないのだ。メイドと戯れるのも程々にしろ。いいな！」

「は！ 気をつけます」

オットーはアレスに一喝すると、どこかへと行ってしまった。まるで俺の役目はこれでおしまいだと言いたげな背中だった。アレスは行き場のない怒りに包まれていた。

「ぷぷ。怒られてやんの」

「このクソメイドが、切り刻んでやるからそこを動くな」

メイドのマキナが、物陰から覗いて笑っていた。アレスが一矢報いろうとしたが、マキナはものすごい速さで逃げて行ってしまった。

「本当に何なんだ。あいつは」

アレスはしばらく逃げていくマキナを見つめていた。アレスは必ずマキナの弱みを握って、精神的に追い込んでやろうと決意していた。

アレスは気を取りなおして、再びソフィア様の部屋のドアの前に立っていた。アレスは何とか部屋から出てきてくれないだろうかと考えていた。心を込めて叫べば出てきてくれるかも知れない。

「ソフィア様！ どうか！ 出てきてください！ アレス、一生のお願いです！」

アレスは意を決し、思い切り空気を吸い込んで叫んだ。廊下中に叫び声がこだました。ただ、しばらく待ったが、返答が無かった。

(呼びかけ方が悪いのかもしれない)

「ソフィア様！ 大変です！ メイドのマキナが王宮中のガラスを割り始めました。早く出てきて止めていただけませんか？」

まったく、うんともすんとも言わなかった。

(声量が足りないのかも知れない。もう一度だ)

「出てこい。ソフィア。俺はここだああああ！！」

アレスは更に大声を出して叫んだ。だが、部屋から、何も聞こえてこなかった。

「おい。邪魔だぞ」

「あ。すみません」

ソフィア様に似たきれいなブロンドの髪の女性がソフィア様の部屋に入っていこうとしている

。

「あの。ここはソフィア様の部屋ですが……」

「……どういう意味だ」

「どういう意味も何もないのですが……まさかあなたがソフィア様ですか？」

アレスはソフィアのことを今まで遠目にしか見たことが無かったので、殆どソフィアがどうい
う外見をしているのか知らなかった。

「それになぜ。外にいるのですか」

「私だって外にくらい出る」

ソフィアはアレスを置いて部屋に入って行った。アレスは自体が飲み込めずに思考が停止して
いた。ソフィアは一度部屋に入ったが、再び部屋の外に出てきた。

「恥ずかしいから叫ぶのはよせ。みっともない」

ソフィアはそう言うと、部屋の中に入って行ってしまった。

「俺だって好きで叫んだんじゃねえよ」

アレスは扉の前で呟いた。

「ぷぷ。ダッサ」

マキナがまた物陰から笑っていた。

「今度こそ殺す！」

アレスは叫びながら、マキナを追いかけた。途中でオットーにぶつかって、夕飯が抜きになっ
たのはまた別の話である。

第三話「ジェラルド国王の秘密。国王は〇〇だった」

アレスはソフィア様といい感じの関係になってきたので有頂天になっていた。最近は何事でもドアごとに挨拶をかわしてあげられるようになったし、滅びろと声をかけてくれるようになった。

ソフィアの部屋に行く途中、ジェラルド国王に会った。齢七十二にもなるが、貴族があり、さすがのアレスもその迫力にびびってしまっていた。もしスカウターがあったら破裂していただろう。アレスはとりあえず目礼をして見送った。国王はちらりとジェラルドを見るとそのまま先に進んでいった。噂では国王は病気の為、国務からは一旦引いているという話だったが意外と元気そうに見えた。

アレスはその後ろ姿を見送るとあることに気づいた。マントがめくれているのだ。国王も人の子マントがめくれてしまうこともあるのだ。これは一大事だと思い、国王にお知らせしようとした。

「ジェラルド国王」

アレスはジェラルド国王のマントの下にチャックがあるのを見てしまった。それを見て、絶句してしまった。着ぐるみを着ているように頭の方にまで伸びているのだ。

「まさかジェラルド国王は着ぐるみを着ているのか」

「私も疑問でした」

マキナだ。またどこから沸いて出てきた。

国王様は最近、体調が悪いようで籠っておられます。食事も部屋の中で殆ど出ることがありません。怪しいと思いませんか？ 噂ではすでに亡くなっているとかいないとか」

「何が言いたいんだ……」

「あの国王様は着ぐるみです。どなたかが国王の振りをしているのです」

マキナはどやっという顔をした。アレスは思わずこいつを殴りたいと思った。

「まさか、そんなことある訳がない。だいたいそんなこと出来るわけがないだろうが」

「ルパンができるのです。一国の国王であるジェラルド様にできないわけがありません」

どんな理屈だよと思ったが、引っかかるものがあった。

「アレス！ マキナ！ 何をやっているか」

オットーだ。なぜかアレスはこっちに来てから毎日のようにオットーに怒られているような気がする。

「お前ら、最近の行動は目に余るぞ。特にマキナ。お前は立場を弁えろ」

「申し訳ございません」

「なら、早々に持ち場に戻れ」

「はい！」

「それとマキナ。お前はアレスが来てからたるんでいるぞ」

「申し訳ございません」

「とにかく頼むぞ」

立ち去るオットー。怒られているマキナを見て、アレスは胸がすーとした気分になった。

「ざまあ見ろ。マキナ」

見ると、マキナは泣いていた。

「オ……オットーさんに怒られた……どうしよう」

がくがくと震えていた。

「ど……どうしたんだ。マキナ」

「あんたのせいだ！ 死ね！」

アレスはどこから持ってきたのか分からない鉄の棒ですねを思い切り強打された。

「痛えええええええ！ 何しやがる！」

「アレス様なんて、バナナの皮で滑って死ねばいいんだあああ。ばかああ！」

マキナは捨て台詞を吐いて素早く去っていった。

「く……そ。何なんだ。あの女は」

それよりも国王が着ぐるみだったら大変なことになる。この謎はなんとしても解明せねばとアレスは思った。

第四話「ジェラルド国王の正体」

次の日、いつもの日課のソフィア様の挨拶が終わった所で、廊下にバナナが見えた。マキナのやつだと思いつつもアレスは、その罠に引っかかってやるほどお人好しではないので無視してその脇を通ることにした。だが、避けてあるこうとしたその瞬間、足が何かに捉えられて倒れてしまった。

「ぐふお！」

見ると左足ががっちりと地面にくっついて離れないのだ。何かよく分からない粘着性のものが俺の靴と廊下の床をくっつけているのだ。

「あれー。何をしていますかー。アレス様あー」

どこか見えない所で隠れていたのかマキナが沸いて出た。ものすごくいやらしい顔をしていた。

「ぐ……この野郎」

「まさかあ、動けないんですかー」

「馬鹿なことを言うな。敵の気配を感じたので床に耳を当てて、確認していたのだ」

「でしたらもう起き上がったらいいのではないですか」

そう言いながらマキナはアレスの頭の上に右足を載せて押しつぶしてくる。

（く……この女。後で殺す。絶対に殺す）

「う。うおっほん」

「あ。国王様おはようございます」

見ると、マキナと戯れているところに国王がやってきたようだ。マキナは慌てて、アレスに載せていた足を避け、バナナを片づけて目礼した。アレスも何とか手を使って起き上がった。

無言で立ち去る国王。相変わらずオーラがある方だ。ただ先日から気になることがあるのだ。国王は着ぐるみを着ているのではないか疑惑だ。あれだけの場面に立ち会って普通に通りすぎるのはおかしい。これはなんとしてでも解明しなくてはならない。

「マキナ。頼みがある」

「なんですか？」

「国王に熱湯をかけてもらえないか？」

「……はあ！？」

「あのチャックが本物だとしたら、おそらく着ぐるみなのかも知れない。熱湯をかければ普通脱ぐだろ」

「着ぐるみじゃなかったら？」

アレスはマキナの肩に手を載せて微笑んだ。

「良くて国外追放。悪くてギロチンかな？」

「あんたがやれ！」

「いや。俺は立場があるだろ。お前なら何とか誤魔化せるだろ。メイドだし」

「その論理展開はおかしい。あんたがやってギロチンにかけられればいいんだ！」

「うるさいぞ！ お前ら！」

いつの間にか引きこもりのソフィア様が廊下まで出てきていた。どうやらソフィア様の部屋の前で押し問答していたようだ。ソフィア様はアレスに滅びろと告げるとマキナに近づいていった。

「うるさくて本も読めない。マキナ、ずいぶんこの騎士と仲良くなったものだな」

「ま……まさか。こんな男、嫌いです」

マキナは顔を真っ赤に染めながら、思いっきりアレスの右足を踏んづけていた。今日に限って何故かマキナは思い切りとんがったピンヒールを履いていた。

「そうか……そうは見えないがな」

ソフィア様はマキナからアレスに視線を移してアレスを舐めるように見つめた。いったい何なんだ。

「ふーん。そう」

と言うとソフィアは部屋に入っていった。

「ソフィア様、誤解してらっしゃいます」

そう言ってマキナも部屋に入っていった。

「どうでもいいけどこれを何とかしてくれ……」

アレスの靴はくっついたままだった。

仕方が無いのでアレスは靴を放置して国王の様子を探ることにした。ブランドの良い靴だったのだが仕方がない。今度、代わりに国費で買うことにすることにした。それはさておいて、国王の部屋の前まで行ったが、部屋の前に門番がいて中に入ることができなかった。何度事情を話しても、「国王様はお休み中です」の一点張りだ。情報が少ないので城の者に国王の情報を聞いて回ることにした。

「国王は部屋の中から出ることは殆どございません」

「ジェラルド様のご病気はかなり悪いらしいわよ」

「ここだけの話だが、ジェラルド様は水虫らしいぞ」

「これはお前だけに教えるが、ご飯をよく噛むと甘く感じるぞ」

皆の話を総合すると、朝の五時頃には決まってジェラルド国王は部屋の外に出ることがわかった。やはり熱湯をかけるしか手は無いようだ。気は進まないがこの国のためにこれはやって置かなければならない。主にマキナが……。

「絶対に嫌です」

「頼むよ。そういうの得意だろ」

「嫌ですし、そもそも変態の言うことは聞けません」

頑ななメイドのマキナさん。この手の女に下手に出るのはどうやら間違えのようだ。アレスは攻め方を変えることにした。

「怖いんだな」

「何が……ですか」

マキナは一瞬眉毛をピクッとさせ、不機嫌そうな反応を見せた。アレスはこれならいけるとそ

の瞬間確信した。

「お前がその程度のメイドだとは思わなかったよ。お前なら朝飯を食べるようにジェラルド様に熱湯をかけるなど造作無いと思っていたのだが、違ったようだな。リサにでも頼むよ」

「ちょっと待ってください。誰もやらないなんて言ってない」

リサはマキナと同じメイドで、マキナはリサのことを一方的にライバル視していた。ちなみにリサの方は全く相手にしていない。やはりマキナにはこの方法が一番いいようだ。

「どうした。無理なんてしなくてもいいぞ。俺はリサに頼むからな」

「やってやるよ」

マキナは白のカチューシャを揺らして、腕組みをして上から目線で言った。

「いや、俺が悪かった。お前に頼む前にリサに頼むべきだった。最初にお前に頼んだおれが馬鹿だったよ」

「リサはダメです。あいつは絶対に失敗する。あいつは頭がいいだけでこういうことは私の方が得意です。それと私の方が絶対に可愛いですから」

「だったらアレス様お願いします。私にやらせていただけませんか？ とお願いしろ」

「はい。アレス様お願いします。私にやらせていただけませんか？ あれ？」

「よーし。そこまで言うならやらせてやろう。明日の朝五時前に熱湯を持ってジェラルド様の部屋の前に集合だ。いいな」

「わかりました。絶対にリサよりも上手くやって見せます」

「さすがだな。マキナ俺が見込んだだけはある。それではな」

マキナは意気揚々と去っていった。これからのマキナのことを思うと可哀想な気がしたが、国のために少々の犠牲は付き物だとアレスは涙を堪えた。

次の日の五時頃、アレスとマキナは二百度の熱々に沸騰したお湯を用意して廊下の物陰からジェラルド様が通りかかるのを待ち構えていた。五時ジャスト、情報通り部屋からジェラルド様が部屋から出てきた。

「マキナ。今だ。行け」

「たいへんー。足を滑らせてお湯が一」

マキナはドジっ娘メイドっぷりを見せてわざとらしく足を絡ませ、熱々に沸騰した鉄鍋のお湯を思い切りジェラルド様にぶちまけた。

「うおおおおおお！ あちあちあちあち」

さすがのジェラルド様も熱湯の熱さに耐えられず、後ろのジップを下ろして着ぐるみを脱ぎだした。中から何者かが現れた。

「あちあちあち。なんてことするんですか。マキナさん」

「だだだだ……誰だ。お前」

「あ……ああ。ガストン様ではないですか」

「ガストン様？ ああ王子か」

着ぐるみの中の人には留学中のガストン王子だった。ジェラルド国王の疑惑を晴らしてやろうと思

っちはいたのだが実際暴いてしまうとどうしたらいいのか分からなくなった。世の中には知らなくてもいいこともある。そういうものだ。

「何をされておるのですか？ なんと！」

オットーがいた。今まで見たことのない驚愕した顔をしていた。

「早くガストン王子、着用してください」

「オットーさん。熱いってちょっと待ってください」

オットーは嫌がるガストン王子に無理やり着ぐるみを着せた。

「我慢してください」

「おい。オットーさん。これはどういうことだ」

ガストン王子は着ぐるみを着ると、完全なジェラルド国王に変身した。いったいどういう仕組みになっているのだろうか。そのままオットーはジェラルド国王（偽物）を部屋に押し込むと神妙な顔をしてこちらにやってきた。

「見てしまいましたね」

アレスに向けて構えるオットー。今まで隠していたのか殺気を纏っていた。オットーは上着を脱ぎ捨てるとじわりじわりとこちらに近づいてきた。

「残念ですよ。アレス、あなたは馬鹿だ。馬鹿だとは思っていましたがここまでとは思いませんでしたよ」

「ぐ……」

教官時代は一度も勝つことができなかったオットーだが、果たしてアレスはこのピンチを乗り越えられるだろうか。

第五話「オットーVSアレス」

ジェラルド国王の秘密を知ってしまったアレスは今、ピンチに陥っていた。かつての教官、今は執事のオットーと対決することになってしまった。

オットーの強さは半端ではない。アレスは教官時代のオットーには一度も勝ったことがない。それも当然でオットーはジェラルド国王の右腕として華々しい戦果をあげ、かつての四国戦争では軍団長として活躍したらしい。軍団長を引退してからは教官を経て、ソフィア様に引きぬかれて今は執事という職に落ち着いてはいるが、アレスは教官時代のオットーのことを思い出して怯えていた。

ただ現役を退いてから大分経つ、今は紅茶を入れることしか脳がないおじさんと化しているオットーだ。今なら行けるのかもしれない。

オットーを見つめる。

「……」

無理だ。オーラが半端ない。アレスにオットーに対する苦手意識があるからかも知れないが。それにしても殺気だけでこれだけ相手に威圧できるものだとアレスは感心していた。

「私も戦う」

「マキナ、お前……」

両手にナイフを持ったメイドが参戦してきた。いつもいがみ合っていたアレスとマキナだったが、ピンチの時には助けてくれるマキナに対してアレスは涙を流しそうになった。

マキナと一緒に戦ってくれるなら、オットーが相手でも何とかなるかも知れない。

「マキナよ。ただで済むと思うなよ。お前あれをやられたいのか？」

オットーはマキナに対して凄んできた。マキナはこんなことでは決して屈しないはずだ。アレスとマキナの間はそんなことでは壊れないはずだ。でもあれってなんだろうか。

マキナを見るとガクガクと膝を震わせていた。なんだかわからないがあれが怖いらしい。

「おい。マキナあれって何だよ？」

「隙あり！」

「ぐお！」

「すみません。すみません。オットーさんすみません。全部あいつにそそのかされてやったことなんです」

マキナ一秒で寝返り、アレスに対してボディブローを食らわしてきた。アレスは予想外の攻撃を回避することができず、悶絶していた。

「誰があんたなんかと手助けなんかするか。ばーか」

「このやろう。マキナ……後で覚えてろよ」

何とかアレスは立ち上がり、オットーと再び、向かい合った。

「アレスよ。私が教官をしていた頃よりどれだけ成長したかテストしてやる」

相変わらず、オットーさん隙はない。しかも、アレスの剣技は全てオットーのコピーだ。恐らく全てのアレスの動きは読まれているだろう。しかし、どうにかしてこの場を切り抜けないといけ

ない。

そこにソフィアが遠くから歩いてこちらに来た。アレスは止めてくれるはずだと期待していた。アレスは視線でソフィアに向かってアピールした。

(頼む。ソフィア様助けてくれ……)

ソフィアは何を思ったのか、群衆に紛れて、腕組みをして傍観している。執拗にアレスはウインクを送ったりなどしたが、全くソフィアには通じていないようだ。しまいには大きく頷いてオーケーサインを出してきた。

「違うっての。何で伝わらないだよ！ しかも何のオーケーだよ」

「アレスよ。何をごちゃごちゃ言っている。さっさとかかって来い！」

ここまで来たらもうやるしか無くなった。

(こんなことなら部屋の片付けをやっておくんだった。つい面倒だと思ってそのままにして置いてしまった。あ、そういえば朝窓を開けっ放しだったかもしれない。雨でも降って部屋に雨が入ってきたらどうしよう。雨で部屋を汚したらマキナにやつに何を言われるか分からない。どうしよう。今のうちに窓だけでも閉めさせてもらうべきだろうか。でも何てオットーに言えばいいのだろう。すいません。オットーさん、部屋の窓を閉め忘れたので少し部屋に戻って来ていいですか？ と言えばいいのだろうか。非常に面白い試みであるが、こんなことを言ったらオットーだけではなく、周りの群衆からもボコられるかもしれない。それだけはなんとしても阻止しなくてはならない。だったらどうすればいいだろうか。とすればこういう考えはどうだろうか。マキナのやつに何とか俺の部屋の窓を閉めるように言えばいいのかもしれない。ただ問題はそれをどうやってマキナに伝えるかだ。俺のジェスチャーはソフィア様には全く通じなかった。こんなことならジェスチャーの勉強をやっておくんだった。今からでも遅くないから習いに行くべきだろうか。どこにいけば習いにいけるだろうか。ソフィア様なら知っているだろうか。ああ。そう考えると今すぐに聞きたくなってきた。)

「早くせんか！ 何を考えておる！」

そういえばオットーと戦うことになっていたことを一瞬忘れていた。だがおかげで少し肩の力が抜けたかもしれない。相手は丸腰だ。負けるはずがない。

アレスは雄叫びを挙げるとオットーに向かって突撃した。

「はあああああ！」

アレスは振りかぶってオットーに何度か斬りかかるが、剣は空を切るだけで全くオットーを傷つけることができなかった。

(こんなにも実力差があるのか……)

「オットーおおおお！」

何度目かの攻撃が空を切った瞬間、アレスはオットーにいつの間にか、組み敷かれていた。

「わしの勝ちだな。甘いぞ。アレス」

「っく、くっそー」

「アレス様堪忍するんですね。ぐりぐり」

そこにマキナがアレスの頭を踏みつけてきた。いつの間に履き替えてのか分からないが、裏に金

具の付いている靴を履いていた。その金具の部分が当たって非常に痛い。

「ぐ……マキナ覚えているよ」

アレスはドエムでは無いので苦痛でしか無かった。

「オットー！ やめなさい。何をやっているのですか」

勝負がついたところで、ようやくソフィアが止めに入った。恐らく個人的に満足したのだろう。

「しかしソフィアさま」

「オットー理由を話しなさい」

「かくかくしかじかなのです」

「……なるほどね。かくかくしかじかね」

「放してあげなさい。見てしまったのなら仕方ありません。アレス理由を話しましょう。私の部屋まで来なさい」

アレス達はソフィアの部屋まで連れて行かれ、ジェラルド国王着ぐるみの件について話してもらった。結論として、ジェラルド国王はもうすでに亡くなっていた。その時はガストン王子（馬鹿だから）には荷が重すぎるし、まだクレア大臣もソフィア様も若すぎると判断してガストン王子にはクロスティーニにフットボール留学したことにして身代わりをしてもらうことにしたらしい。

「これは私と王妃さまクレア大臣、ソフィア様、少数しか知らない事実です」

それとこの精巧な着ぐるみはクレア大臣が作り、魔法使いアイリスの魔法で作ったらしい。

「他言無用ですよ。この事実が他国に知られると、ストレガが格好の餌食になってしまいます。分かっていますね」

「実務は王妃のローサ様とクレア大臣がやっているので問題は無い。アレスは余計な心配はするな」

「それとふたりとも今後こういうことは二度とやらないでちょうだい！ 面白いけども」

「「はい……」」

ソフィアはアレスとオットーに釘をさした。アレスはこのことを墓までもっていこうと決意していた。

第六話「クレア大臣。実は〇〇だった」

朝起きると城が騒がしかった。騎士や使用人があっちこっちで走り回っている。今までこんなことは無かったのでどうしたのかと思い、部屋の外に出た。

「早くしろ。急がないか！」

「ドーナッツだ。それと大吟醸も忘れるな！」

「なんだこれは」

「クレア大臣がお帰りになるのですよ。そんなことも知らないんですか」

「げ！ マキナいつの間に！」

いつの間にかに現れたマキナによるとクレア大臣が帰ってくるらしい。クレア大臣はソフィアの姉にあたる人物で、アレスも実際には会ったことがなかったが、オットーによると実務は事実上クレア大臣がやっているらしい。対外的な交渉はクレア大臣が務めているという話だ。そのため長期で城を離れることがよくあるということだ。

（いったいどんな人物なのだろうか）

「ソフィアの姉らしいからキツイ性格だろう。あまりお近づきにならないほうがいいのかもしれない。今のうちにどこかに身を潜めていたほうがよさそうだ」

ほとぼりが収まるまでどこかで時間を潰そうと、城を抜けだそうと思っていると、マキナに捕まった。

「逃げようとしても無駄ですよ」

アレスはいつの間にかに手錠をかけられていた。

「何の真似だ」

「今アマー口で流行っている手錠プレイですよ。つい私も欲しくてお取り寄せしちゃいました。やはり初めてはアレス様にやらしてもらおうかと思ひまして」

「マキナよ、頼むから気配を消して近づくのはやめろ……」

「私の数少ない楽しみの一つなんです。やめろと言われても止められませんよ。さあ、行きま

すよ」
マキナに連行され玄関前まで連れて行かれた。そこでようやくアレスはマキナに手錠を外された。どうやら玄関で並んで出迎えなければならないらしい。どこかの妹とは大違いだ。

騎士軍団と使用人総出で並んでお出迎えをする。これだけでクレア大臣のすごさが分かる。ジェラルド国王があんな（着ぐるみ）状態なのだから、クレア大臣が実質のトップと言っても過言ではないからかもしれない。

しばらく待っていると、口ひげがチャームポイントの騎士軍団長アルフレドを伴ってクレア大臣が来た。

「クレア大臣。アルフレド様お帰りなさいませ！」

「お帰りなさいませー！ ファー！」

「クレアちゃん！ おかえりー！」

突如として、騒がしくなった。俺の位置からは見えないがどうやら帰ってきたらしい。

「みんなー。ただいまー。おみやげだよー。マルサラ産の岩塩で作った煎餅だよー」
一人一人に何かを手渡しているようだ。アルフレドの髭は見えるのだが、肝心のクレア大臣が見当たらない。みんななぜか、にやついているというか微笑んでいる。
ようやくこちらまで来た。現在のトップがどんな人物か気になっていたの、アレスは身構えていた。

「はい、どうぞ」

声は聞こえるが、姿が見えなかった。全く見当たらない。俺には見えないのだろうか。辺りをキョロキョロと見ましている所を隣にいたマキナに脇腹をつつかれた。

「下です……」

「お、おお！ ちっちゃ！」

思わず口に出てしまった。それもそのはずでクレア大臣は5, 6歳の少女にしか見えない体型をしていたのだ。短いブロンドの髪の色はソフィアの姉だということが分かる。黒いローブを翻して、アレスに煎餅を手渡そうとしている。

「貴様、クレア大臣になんという無礼な言葉を」

「構いませんよー。アレス君。はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます。頂戴いたします」

アレスは受け取りやすいように片膝をついて受け取った。その姿を見て、クレア大臣はにっこり笑って次の人に向かった。

「……とんでもない馬鹿ですね。クレア様にちっちゃ……なんて言うなんて」

「……うるさいな」

マキナが他の人に聞こえないようにぼそっと言ってきた。そういえばなんで俺の名前を知っているんだ。俺のような末端の騎士のことなど知っているはずなのに……。アレスは何か引っかかるものを感じていた。

◇

「全く、あなたはとんでもないわね」

「そのとおりです。本当でしたらギロチンにされても仕方がないですぞ」

アレスは今日のクレア大臣への暴言の件で、ソフィア様の部屋に呼ばれて、オットーとソフィアから説教を受けていた。アレスは床に正座させられ、今二時間ほど経過していた。もう足の感覚が殆ど無い。ソフィアとオットーの後ろにマキナが控えていて、こちらをニヤニヤと見ていた。

「こんにちはー」

「ね、姉さん？ どうしてここに？」

そこになぜかクレア大臣がやってきた。軍団長のアルフレドを伴わないで一人でやってきた。

「アレス君を貸してもらおうかと思って」

「な、なんでこいつを？」

「クレア大臣、せめて独房行きくらいでゆるしていただけますか？」

「んーん？ 違うの。個人的に用があってきたの？ それでいいの？」

「いいと言いますか。なんといいですか」

珍しくソフィア様が言い淀んでいた。

「じゃあいいね。借りていくね」

「あ、あ。ちょ、ちょっと。痛！」

アレスはいきなり引っ張られたもので、足がひどくしびれていたもので思い切りつんのめってドアに頭を強打していた。

「あ、ごめんー。んじゃ借りて行くねー。んしょ、んしょ」

クレア大臣は起き上がれないアレスを引きずって自分の私室へと連れて行った。

「クレア大臣は何の御積りなのでしょうね」

「姉さんの考えること何て分かるはずがないじゃないの！」

「何も起きなければいいのですが……」

◇

「それでなぜ俺は連れてこられたんですか？」

「見せたいものがあるのー」

そう言うと、壁際にあった白い布をクレア大臣は取り払った。そこには一台の機体があった。

「これは？」

「木蓮式式。マルサラの技術にクレアのオリジナルを加えた、機動兵器なの」

人型の機械のように見えるが腕は着いていない。その代わりに大きな二本の足と胸にあたる部分に大きなくちばしのようなものが付いている。人と言うよりは鳥のようなデザインだ。

「クレアね。今回マルサラには機械技術を学びに行ったのー。知ってるよね。国王のこと」

「はい。知ってます」

「クレアねー。この国をこの木蘭式式で守ってみせる。今国外は大変なことになってるの。特にアマー口とロゼッタは毎日小競り合いが続いてる。マルサラもそれを見て、兵器を強化してるの。いつ、ストレガが襲われるか分からない。うちも騎士団は強力だけど、こんな兵器が投入されたら一溜りもないと思うの。だからクレアが国王になるの」

「ソフィア様も恐らくその気だぞ」

「でもあの子は何もできないの。人をひきつける魅力はあるけどもそれだけ、クレアはね。この機械でバルガス大陸の一番になってみせるの」

「そうか……」

「まあ、それは置いておいてー。クレアのこと覚えてない？」

「んー」

「これをかければ分かるかなー？」

黒縁メガネをかける。ソフィアと同じブロンドのくせっけの黒縁メガネ何か見覚えがあるような

気がした。

「クレアってあのクレアか！」

そういえば小さい時に騎士学校に送られる前に女の子二人と遊んでいたことがある。たしかにそうだ。そうだったらもう一人はソフィアだったのだろうか。

「そうだよー。クレアだよー。ようやく思い出したね」

よほど嬉しかったのか、クレア大臣はアレスに抱きついた。

「おい。ちょっと」

「姉さんみせたいものって……」

そこに運悪くソフィアとマキナが入ってきた。

「アレスさん、なんと鬼畜な」

「お前ら、わざとやってるだろー！」

「一刻も早く、騎士軍団長とオットーさんにお教えしないと団長一さん。オットーさんー！ アレスさんがクレア大臣に手を出しましたよー！ さっそくギロチンにしましょう」

マキナが嬉々として騒ぎ出した。

「おい、こら、やめろ！」

「それよりも話しがあるんでしょ」

「クレアが必ず、国王の後を継ぐからね。この機械で」

「私が継ぐわ。姉さんには無理よ」

「なんでよー」

「だって、どう見ても幼女にしか見えないわ。説得力なんてないじゃない。誰が幼女のしゃべっていることを真面目に聞くとと思うの」

「そんなの、アイリスの魔法でなんとかなるもん。魔法で大きくしてもらおうもん」

「無理よ。いくら姉さんの頭がよくたって人には分相応というものがあるの。姉さんはその器ではないわ」

「じゃあ勝負よ。どちらがふさわしいか。追って勝負方法は伝えるから、首を洗ってまってなさいよー」

びしっとクレア大臣はソフィアに指を突きつけた。それを見たソフィアはやれやれという様子でクレア大臣に言った。

「姉さん。国王は勝負で決めるものではないわ。前国王の任で決まるものだわ。姉さん、いい機会だから聞くけど、あの慎重なジェラルド国王のことだから、遺言の一つでもあったのではないの？」

「ギク、なんのことー？」

「そうでなければ第一継承権がある姉さんが有利なはずだわ。わざわざ勝負などといわないはず、出しなさい。怒らないから」

ソフィアはまるで子供を叱るお母さんのように言った。ソフィア達は忘れていたようだが、第一継承権は着ぐるみの中の人であるガストン王子が持っている。

「そ、そんなの。持ってないもんー」

「に、逃げるなー」

ものすごい速さでクレア大臣は部屋からいなくなった。

「アレステ命よ。クレア大臣に張り付いて遺言を奪取しなさい」

「はい、はいー？」

「いいから早く追いかけてなさい！」

「わ、分かった」

今まで平和だと思っていたが、国外では大変なことになっているようだ。確かに早く国王は決めておいた方がいいだろう。果たしてどちらが国王になった方がいいだろうか。そして俺はどちらの側に着いた方がいいだろうか。アレスはクレア大臣を追いかけてながらそんなことを考えていた。

第七話「クロスティーニの王子は馬鹿だった」

クレア大臣は次の日、軍団長アルフレド以下何人か引き連れて出て行った。結局、遺言のことは分からなかった。

その代わりに隣国クロスティーニからアホ王子がやって来た。クロスティーニの第一王子フランスである。王子100人近い騎士軍団をぞろぞろと引き連れて、馬鹿丸出しでやってきた。馬鹿みたいな巻き毛にやたらととがった三角帽子に真っ赤なマント。天を突くような尖った靴にやたらと派手なピンクの上着を着ているので否が応でも目立っていた。

「おーう。僕のそふいあー。今日も美すいーねえ」

「え、ええ。ありがとう。ゆっくりしてって」

「まきなさあんもお美すいーですねえー」

「……。あ、ありがとうございます」

あのマキナが引いていた。3mくらいの距離がある。

(これが心の距離というものだろうか)

「そふいあー。今日もお。君のためにプレゼントを用意したんだ。ゴメス！ 頼む」

「ハ！ 今すぐに」

パチッと指を鳴らすと、ものすごく色黒な馬鹿でかい騎士と何人かの騎士が入ってきて、銅像を10体ほどもってきた。やけにリアルなフランス王子の等身大の銅像いや金像だ。(とてつもなくいらねえ)

「純金製の僕の銅像だよ。大切にしてくれたまえ」

「え、ええありがとう。大切にするわ。マキナ、後で、溶かしてじゃなくて大切に保管してね」

「分かりました。大切に大切にいたします」

(こいつら絶対溶かして金にしやがる)

「この間はこの玄関をバラの花でいっぱいにしたんですよ」

いつの間にかアレスの隣に来ていた。マキナがアレスに耳打ちしてきた。

「ソフィア、ジェラルド国王の容態はどんなんだい？ 今日こそ挨拶をさせてもらいたいんだが」

「ちょっと今日も具合が良くないの。悪いけど返ってあなたに会うと悪くなる。いえ、具合が悪いからと最近は誰にも会いたがらないの」

「それはいけない。ゴメス！」

再びパチッと指を鳴らすと、先ほどの色黒の騎士がやってきた。どうやら彼はフランスのお付の騎士のようだ。

「バルガス大陸で一番の医者を持ってきなさい。今すぐにだ。金はいくらかかっても構わん」

「ハ。今すぐに用意いたします」

「だ、大丈夫よ。昔からお世話になっている主治医に見させているから」

「そうですか。それは残念です。ゴメスやめさせろ」

「ハ！ 了解です！」

「ソフィア。お腹が空かないかい。今日はとっておきの料理を用意してきたんだ。ゴメス！」

「ハ！ 40秒で支度します！」

「い、いいわ。今お腹減ってないから」

「ゴメス！ やめていいぞ」

「ハ！ 了解です」

段々こいつはゴメスって言いたいだけじゃないのかと思えてきた。

「クレア大臣はいらっしゃいますか？」

フランシスは嘗めるように地面をキョロキョロと探し出した。

（いや、クレア大臣はそこまで小さくないから）

「今日もないのよ。残念ね」

「そうですか。今日こそはご挨拶をと思ったのですが、クロスティーニの方にもいらしていただけないですし、残念ですね」

今思うとこれも見越して、クレア大臣はいなくなったのかもしれない。

「だいたい誰だ。あのアホ丸出しのやつは」

「あれはクロスティーニの王子フランシス様です」

「まあ、どうでもいい。俺には関係ない」

ソフィアにはまるで相手にされていないようだ。アレスは飽きたのでブルーノとキャッチボールしに戻ろうと思ったら、その様子がフランシスの目に入ったようだ。こちらにやってきた。

「こちらの騎士は初めて見るが」

やばいなと思いつつ、アレスは仕方が無いので頭を下げた。

「私の護衛の騎士よ。大した男ではないわ。食事でもしながらお話ししましょう」

「貴様！ 何という名前だ」

「……」

「名を名乗れ。私をクロスティーニの王子だぞ」

「俺はパブロ・ディエーゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ホアン・ネポムセーノ・マリーア・デ・ロス・レメディオス・クリスピーン・クリスピーアーノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダード・クンテープマハーナコーンアモーンラッタナコーシンマヒンタラーユッタヤーマハーディオッカポップノッパラットラーチャターニーブリーロムウドムラーチャニウェートマハーサターンアモーンラピマーンアワターンサティットサッカタティヤウィッサヌカムプラシット・ベンティアドショットヘーゼルナッツバニラアーモンドキャラメルエキストラホイップキャラメルソースモカソースランバチップチョコレートクリームフラペチーノでございます」

「パブロ・ディエーゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ホアン・ネポムセーノ・マリーア・デ・ロス・レメディオス・クリスピーン・クリスピーアーノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダード・クンテープマハーナコーンアモーンラッタナコーシンマヒンタラーユッタヤーマハーディオッカポップノッパラットラーチャターニーブリーロムウドムラーチャニウェートマハーサターンアモーンラピマーンアワターンサティットサッカタティヤウィッサヌカムプラシット・ベ

ンティ アドショットヘーゼルナッツバニラアーモンドキャラメルエキストラホイップキャラメルソースモカソースランバチップチョコレートクリームフラペチーノ君。君は第一師団団長を解任されたようだったね」

「……ハ！ そのとおりでございます」

なんでこいつがそんなこと知ってるんだよと思った。しかも、名前まるまる返されたよ。

「ソフィアもこんなやつを護衛にしていると怪我をするぞ」

「彼はよくやっているわ」

珍しくソフィアがフォロー。それが気に食わなかったのか。

「ならばうちのゴメスと対決してみてくれないか。ゴメス！」

「うおおおおお！」

「おやめください。こんな場所で」

「そうであったな。失礼。まあやらずともゴメスの方が上か。ハッハハハハのハ」

フランシスはソフィアと一緒に高笑いして去っていった。

◇

「なんなんだ。あいつは！」

フランシスに挑発され、アレスは激怒していた。

（そういえばブルーノと玉子キャッチボールしていた時に、ブルーノの暴投でぶつかったやつがいたな。誰もみていなかったから暴力で黙らせたが、今考えるとクロスティーニの王子だったのかも知れない）

「なんとか一泡吹かせたい。マキナ手伝ってくれ」

「私も彼のことはいつかどうにかしたいと思っておりました。お手伝いしましょう」

初めてマキナと意見が一致し、がっちりと握手をした。

◇

「私に考えがあります」

アレスはマキナについていくことになった。

「どこに行くんだ？」

「着いてくれば分かります」

見覚えのある部屋。クレア大臣の部屋だ。マキナは懐から無数の鍵を取り出した。

「私は全ての部屋の鍵を所持していますので、クレア大臣の部屋も開けることができます」

「いいのかよ。勝手に入って。クレア大臣のメイドはリサだろ」

「リサが入れて、私が入れないとは道理はないでしょう」

マキナの目はすわっていた。リサにライバル心をむき出しにしているマキナとしてはそんなことは許されないことらしい。相変わらずクレア大臣の部屋には機動兵器「木蓮貳式」が無造作に置

かれていた。

そこに一目散にマキナが木蓮式式によじ登り始めた。アレスが止める暇も無く操縦席に座った。

「おい、おい、おい！ さすがにまずいだろ」

「大丈夫です。私動かせますから」

「いやいやいや。そんなこと聞ってるんじゃないよ」

「これでも私、二種免許持っているんですよ。舐めないでください」

マキナはアレスの話は全く聞いていなかった。

「ここをこうしてこうすれば、ほら、動きましたよ。アレスさん」

低く唸るような音が出て、起動した。この機動兵器は何をエネルギーとしているのだろうか。

「乗ってください。置いていきますよ」

「……分かった」

操縦席の中は狭かったので後ろから覆いかぶさるような形で座った。

「変なことしないでくださいよ」

「するかよ！」

「木蘭式式でます！」

「おい！ そのサイズからしてこの部屋から出るのは無理そうぞ。どうするんだ」

「そのまま突破します！」

「おい！ 無茶するな」

木蓮式式はクレア大臣の部屋を破壊して部屋から出た。城中にもものすごい轟音が鳴り響いた。木蓮式式は構わず、素早い速度で城の廊下を滑走した。

第八話「木蓮式式」

クレア大臣はアルフレドの馬で隣国のマルサラに来ていた。マルサラの国王に挨拶を済ませ、今はヴァルト山脈の中腹辺りに住んでいるトール博士の所の元へと向かっていた。

「くしゅ」

「どうしました？」

「なぜか悪寒がします」

「大丈夫ですか」

「大丈夫です。行きましょう」

クレア大臣はマルサラで機動兵器の量産化が実現したという話を耳にしていたので、そのことについて聞くために開発者のトール博士の元へと向かっていた。

「しかし、いつもながら思いますがトール博士はとんでもない所に住んでいますね」

「そうですねー」

トール博士は機動兵器の開発者とは思えない古びた丸太小屋のような所に住んでいた。クレア大臣がドアを強めにノックすると、不機嫌そうな顎鬚を生やした怖そうな老人が出てきた。

「なんじゃ。お主か」

「クレアです。お久しぶりです」

「何の用じゃ。わしは忙しいのじゃが」

「今日はマルサラの量産機動兵器について聞きに参りました」

「……入れ」

少し間があったが、トール博士はクレア大臣だけを家の中に入れてくれた。アルフレドは仕方が無いので家の外で待つことにした。

「あれはな。わしは一枚も絡んでおらん。国王が勝手にやったことじゃ」

「じゃあ本当なのですか？ 機動兵器の量産化に成功したっていう話は」

「本当じゃ。ただわしの知らん所でやりおって。ふざけた連中じゃ。あれはわしの作ったT-02をベースにした機動兵器でT-02に比べると大分性能は落ちる」

ちなみに木蘭式式はトール博士の開発した機動兵器T-02をベースにした試験用機動兵器で、もちろんトール博士の許可は取っている。

「そして、近々この量産機でアマー口とやりあうらしいのじゃ。おそらくこれでこの大陸の戦闘のあり方は変わってくるはずじゃ」

アマー口とマルサラの国境付近での戦闘が激化している。アマー口はマルサラの豊富な鉱物資源を狙っていた。そのため機動兵器の量産化はマルサラにとっては危急に行わなければならないことであったが、量産化に成功したというのは本当の話のようだった。

「これから大変なことになりそう。早く動かないと。アルフレド今すぐ帰りますよー。ありがとうございます。トール博士」

「また来なさい。あんたなら大歓迎だ」

クレア大臣はアルフレドの馬に跨り、早急にストレガに戻った。

◇

その頃、ストレガの城内では大変な事件が起こっていた。マキナが操縦する木蘭式はフランス王子を捉えていた。

「ゴメス！ 前方に危険物がある。なんだ。あれはなんでこんなものがストレガにあるんだ！ この機動兵器はマルサラの技術なはずだ！ ゴメス何とかしろ！」

「ハ！」

「目標発見。照準固定レーザー発射します」

青みがかったレーザーがゴメスを打ち抜いた。回避しようとしていたゴメスだったが一瞬にして氷づけになった。

「なんとする威力だ。覚えてろよ」

その様子を見て、青ざめたフランス王子は一目散に逃げた。

「すっきりしたな。マキナ」

「これがあれば世界をとれる」

「おい、マキナ何を言ってるんだ」

マキナは木蓮錦の操縦桿を握りながらプルプルと震えていた。

「どけ！」

「お、おい！」

マキナはアレスを振り落とした。とっさの出来事だったのでアレスは踏ん張ることも出来なかった。

「マキナ！ 何をするつもりだ」

「これで私は世界を取れるー！！」

マキナは木蓮式でどこかへと行ってしまった。

「大変だ。あいつおかしくなってしまった」

アレスはマキナを慌てて追いかけた。

◇

「と、止まれ！」

木蘭式は次々現れるストレガの騎士を両方の足でなぎ倒していった。普通の剣では傷一つ付かない装甲になっている。木蘭式は一般の騎士の手には負えなかった。

「囲め！ 絶対に外に出すな！」

「だ、駄目です。剣が効きません」

「はっははは。そんなものでは傷一つ付かないですよ」

高笑いしながらマキナの乗る木蓮式は玄関へと向かっていった。



その頃、クレア大臣の部屋ではオットーが激怒していた。クレア大臣の部屋の壁には木蓮式式が出撃した大穴が開いていた。

「あいつらめ。クレア大臣の部屋をこんなにしおって。リサ、騎士団に伝えて玄関を固めさせろ。絶対に外に出させるな」

「は、はい」

「マキナ、アレスわしを怒らせるとどうなるか……身をもって知ってもらおうか」

オットーの手には何年も使われていなかった剣が握られていた。



「だ、だめだ。剣が貫通しない」

第一師団団長ブルーノは第一師団を率いて、木蓮式式と戦っていたが、まったく歯が立たなかった。先ほどまで他の騎士とキャッチボールをして遊んでいたのが嘘のような光景が目の前に広がっていた。

「アイリスを呼んでこい」

「アイリス魔法師は酔いつぶれております」

「いいからたたき起こせ！ 今すぐにだ」

ブルーノは第一師団の騎士に魔法師のアイリスを呼びに行かせた。あいつならなんとか出来ると思ったからだ。

「その前になんとかここを持たせないと。勝負だ。第一師団隊長ブルーノが相手をしてやる！」

ブルーノは剣を構えると、木蓮式式に立ち向かっていった。一世一代のブルーノ戦いが今始まった。



「だ、だめだ」

ブルーノは木蓮式式の足に何度も振り払われ、ボロ雑巾のようにぼろぼろになって倒れていた。今は立ち上がることもままならなかった。

「なんなんだい。いったい」

「あれをなんとかしてください」

そこようやく魔法師のアイリスがやってきた。眠そうな目をこすり、だるそうにフラフラとやってきた。

「ありゃ。無理だ。あれはなあたしがこのバルガス大陸で少ししか取れない魔石を積んでいるんだ。あたしの魔法でも弾くよ」

そこに帯刀したオットーがやってきた。

「アルフレド軍団長はどうした？」

「軍団長はクレア大臣と共に出ております」

「全師団を出せ！ 今すぐにだ！」

「もう出ています。第一、第二、第三ともに壊滅。第四、第五、第六以下はただいま交戦中です」

「なんとも情けない。たった一機の機械ごときにわしも出るぞ。わしに続け」

玄関を守っていた防御部隊は木蓮式式をとめようとするが、レーザーと硬い防御を破れず苦戦していた。あっという間に正面玄関を破られ、中庭に出られてしまった。オットーは残存している騎士を引き連れて、木蓮式式を追いかけて中庭に出た。

◇

中庭では全師団が木蓮式式を止めようと集結していた。

「くそ！ たかが一機落とせんとは！ 矢で操縦席を狙うんだ」

弓矢部隊は照準をむき出しの操縦席に合わせて矢を射ったが何かバリアーのようなもので守られているようで、マキナにたどり着く前に矢は弾かれてしまった。

「ありゃー。完璧に作りすぎたか」

アイリスが人事のようにつぶやいていた。

「わしが相手じゃ」

そこに合流したオットーが木蓮式式の目の前に立ちはだかった。

「マキナ！ そこから引きずり出したらアレをするから覚悟しておくのじゃな」

「……」

的を絞らせないように素早く動き、木蓮式式を翻弄した。その隙にオットーは木蓮式式の右足に切りつけた。

「くっ！ なんと」

確かにオットーの剣は木蓮式式の右足を捕らえたはずだったが、まったく手応えがなかった。まるで剣先が滑るように受け流されたようにオットーは感じた。対騎士用に作られた木蓮式式のボディは、剣を弾きように特殊加工されていたのだ。

「オットー、剣は効かんぞ。諦めるんだな」

「アイリス、貴様も手を貸さんか」

木蓮式式から離れた所で魔法師のアイリスが胡座をかきながら、叫んできた。

「あれは魔法も弾くんだよ。あたしの手には負えない」

剣が効かないようなので、剣を捨てて棍棒で殴る。さすがの木蓮式式も態勢をくずされていた。人間の動きとは考えられない速さで木蓮式式を翻弄する。徐々にだが、木蓮式式の装甲がゴコゴコになっていく。

振りかぶり攻撃。式式は横に大きくジャンプした。

「なんじゃと。しまった」

そこに青いレーザーが放出された。さすがのオットーも避けきれず、レーザーの餌食になり凍りづけになってしまった。

「ぐうう。無念じゃ……」

そういったきり、オットーは棍棒を地面に落とし、沈黙した。

◇

「マキナ勝負だ！」

オットーの戦う様子を陰から伺っていたアレスは、オットーがやられているのを見ると、木蓮式式の目の前に飛び込んできた。手には先ほどオットーが持っていた棍棒が握られていた。

アレスはレーザーをかいくぐりながら、戦った。

(なんとか操縦席の裏に回り込めばいけるはずだ)

「うおおおおおおお！」

背後に回りこみ、木蓮式式の背中を踏み台にして大きくジャンプした。そこには無防備なマキナの頭が見えた。その頭をアレスは横殴りに殴った。運良く背後にはバリアがなかった。

「あ。そういえば後ろにはバリアつけてなかったわ」

マキナは木蓮式式の操縦席から、脱落した。瞬く間に騎士団に囲まれ、包囲された。

「マキナー。覚悟するんだな」

「ひーん。ゆるしてー」

「オットーさん。こいつをどうしますか」

お湯をかけてもらい、復帰したオットーがマキナの前に仁王立ちしていた。オットーの顔は今まさに爆発しようとするすごい顔をしていた。

「ここは私に預けてください」

そこにマキナの保護者のソフィアがやってきた。冷静を装っているように見えたが、顔は引きつってかなりお怒りのようだ。

(マキナ……死んだな。いいやつだったのに)

アレスはマキナに向けて、手を合わせた。

「マキナ来なさい……」

ソフィアはめちゃくちゃ怒っている。当たり前だ。

「ざまあないな。マキナ」

「あんたもよ」

「え。なんで？」

アレスはソフィアにマキナ共々連れて行かれた。

「そういえば私掃除がまだだったー」

「逃げられると思うの」

「いえ……」

アレスは強い力は人をだめにするなと思った。



「あれ？　なんで、なんでなのー。もーちゃんがボコボコになってるー」

マルサラから急いで帰ってきたクレア大臣はボコボコになっている木蓮式式を見て、呆然としていた。もーちゃんと名付けて可愛がっていたので、今や泣きそうになっていた。

「クレア大臣。どうやら他の騎士に聞いた所によるとメイドのマキナが木蓮式式を使って暴れまわったようです」

「クレアのもーちゃんがー。ボコボコにー。マキナはご飯抜きです！」

クレア大臣は木蓮式式を撫でながら叫んでいた。



アレスとマキナはソフィアの部屋で正座させられていた。オットーとソフィアは無言で仁王立ちをしている。言わなければならないのだが、マキナ達は自分の側近なので躊躇しているのだろう。やがて、オットーと短く会話をして、意を決してマキナは言った。

「あんたたちは国外追放よ。しばらく頭を冷やしてきなさい」

「え、まじで」

どうやらアレスとマキナはしばらく国外追放されることになった。

第九話「ロゼッタ入国」

「なんでこんなことになったんだ……」

アレスとマキナは木蓮式騒動があったその夜に木箱に詰められた。そしてそのまま馬車に載せられ国外追放された。今、馬車から打ち捨てられ、アレスは途方に暮れていた。

「ひでえ目にあった。あれが人間のやることかよ。俺は荷物じゃねえぞ！」

「私はアレス様にいつ襲われるかと思い一睡もできませんでしたよ」

「お前、めちゃくちゃ熟睡してたじゃねえかよ！　いくらなんでも順応性高すぎるだろ」

「これもメイドとしての基本ですよ」

アレスとマキナは木蓮式騒動で国外に追放されることになった。一応馬鹿だと言っても一国の王子をひどい目にあわせたということでクロスティーニの王子に気を使っただけのことだ。ほとぼりが収まったらソフィアは呼び戻すと約束をしていた。

「だいたいここってどこだ？」

「たぶんロゼッタ」

「なんで分かるんだ」

「あれ見て」

マキナの指を指す方を見ると、その先には壁のようにそそり立つ頑丈そうな塀があった。それは果てしなく広がっている。まるでこの国を覆うようにも見える。

「あれはロゼッタウォール。ロゼッタの象徴」

ロゼッタはストレガから南西にあたる国だ。徹底的に他国の侵入を拒んでおり、内情は謎に包まれている。その象徴がロゼッタウォール。分厚いコンクリートで国全体を覆う壁は国内外のもの全てを阻む。それはこの国民にも言えることだ。余程のことがない限り、政府の高官でも国外へは出ることができない。

庶民は生まれてから死ぬまでこの壁の中で生活することになる。まさに鴛籠の中に飼われている鳥のようだ。

「なんでよりもよってこんなところに送られるんだよ」

「たぶん、アマー口とマルサラは今、戦争になりそうだし、クロスティーニだと意味無いし、そうするとロゼッタしか無かったのかもしれない。知らないけど」

仕方がないので、アレスはクレア大臣から持たされた手焼き煎餅を齧っていた。クレア大臣は笑っていたが木蓮式を傷物にされたことで相当怒っていた。アレス達を有無を言わず木箱に詰めたのはクレア大臣だった。

「あんなクレア大臣見たのは初めて……怖かった」

「それよりどうにか今夜の寝床は探さねえとな」

そんなことをマキナと話していると、周りが騒がしくなった。

「うえ。わさびじゃねえか」

「ばーか。騙されやがって。逃げろ」

茶色いハンチング帽を被った二人の女の子がアレス達に向かって逃げてきた。その後、五、

六人ほどの黒い軍服を来た男たちが追いかけてきている。

「兄さん。助けてくれ」

金色の髪をした一人の女の子がアレスに助けを求めてきた。

「おい。お前その女を渡せ」

目付きの鋭い目付きの悪い黒服が脅すような口調で言った。

「アレス様、渡した方がよろしいかと」

「早く引き渡せ！ 我々が誰か分かっているだろ」

アレスは軍服の男の命令口調にイラッと来てしまい、つい言い返していた。

「知らねえな。誰だよ。あんた」

「お前、外の奴らか。どうやって入ってきた」

「そんなもの俺が知るか。いいからどこかへ行きやがれ！」

「ああ、なんで早速面倒なことになっているのですか」

嘆くマキナ。こうなることはしかたがないのかもしれない。

「お前ら痛い目に合わせろ。ヴェヒターの怖さを思い知らせてやれ」

目付きの鋭い軍服の男が命令すると、その他の軍服がサーベルを抜き、アレスに切りかかってきた。

「死ねえ！」

「お、来るか」

アレスはあっさりと軍服達をあしらい、数分後には切りかかってきたもの全員を地面に倒していた。

「なんだ。貴様は」

「来いよ。お前も相手してやるよ」

「そんな面倒なことはするか」

目付きが鋭い男は右手を口に含むと口笛を吹いた。そうするとどこからともなく軍服がぞろぞろと集まってきた。

「げ！」

「全く……。は！」

「なんだ、これは！」

「逃げる。アレス様。早く！」

マキナの煙幕を放ち、アレスの手を取って逃げた。

◇

「はあはあ。なんでこんな目に」

「あんたのお陰で助かったよ。私はマリー」

そう言ってアレスに握手を求めてきた。彼女はカーキ色のハンチング帽を被っているのですが、顔はよく見えなかったが、そこから見える長い金色の髪がひと目につく。歳は十六、七といったと

ころだろうか。顔立ちは整っていて美人の部類に入ると思う。釣り上がった青い瞳が彼女の強気な性格を表していた。

「リリーです。よろしくです」

こちらはまだ子供のようで、こちらを伺うようにおどおどと目線を寄越してきた。銀色の髪を後ろで束ねていてそれがより一層彼女を子供っぽく見せている。少し垂れたような目は思わず頭を撫でたくなるように愛らしい。

「あんたらのお陰で面倒なことになったじゃねえか」

「自業自得な所もあると思うけども」

「なんだと！」

「喧嘩しないでください。それよりも早く戻らないと、みんな心配していると思うです」

「そうね。あんたら外から来たのか。行く所あるのか？」

「いや、今日の寝床を探していた所だ」

「じゃあこれも何かの縁だ。寝床くらい用意してやる。着いてこい」

「ああ。よろしく頼む。俺はアレスだ。そして、こっちは俺の下僕のマ……痛！」

アレスはマキナにどつかれた。

「妹のマキナです。宜しくお願いします」

「何するんだ！」

「こうしたほうが何かと便利からですよ。アレス様は馬鹿ですか。私はこれから兄さんと呼びますからね。アレス様もマキナと呼び捨てになって変わりませんか」

「や、止めてくれ。なんだそれ。気持ち悪すぎだろ」

「我慢してください。兄さん♪」

アレスはぞっとして鳥肌が立った。

「ではアレスさん、マキナさん付いてきてください」

アレス達はマリー達に着いて行くことになった。

◇

一時間ほど歩き、案内されたのは打ち捨てられたようなコンクリートむき出しの建物だった。とても人が住んでいるような場所には見えない。

「ここは昔軍の宿舎だったが、今は使われていないので間借りしているんだ」

「電気は通っているのか」

「通っていない。いないから発電機を持ち込んでそれでなんとかやってる」

「そうか……」

この国の人間はみんなこのようにして生活しているのだろうか。ストレガに比べると生活水準が低すぎるとアレスは思った。

「まあ入ってくれ。歓迎するよ……きゃ」

マリーが扉を開けようとする、マリーに一人の女が抱きついてきた。ふわりとした栗色の髪

をしたみんなのお姉さんという感じの女だ。

「この方たちは？」

「私達を助けてくれたんだ。行くところが無いらしいから連れてきた」

栗色の髪の子はアレスとマキナを値踏みするような目でしばらく見ると、ニッコリと笑顔になって歓迎してくれた。

「私はエルナ、彼女達を助けてくれてありがとう」

建物の中に入ると中は意外ときれいになっていた。入るとすぐに玄関ロビーのような所で、上を見上げると吹き抜けになっていた。そこか螺旋状の階段が見える。本当にこんなところが軍の宿舎だったのだろうか？とアレスは疑問に思った。

「外見は軍の宿舎だけど、内装は色々改装したんだ。そのままだと使い難いな。よし、みんなを紹介しよう。カール。出てきてくれー。新入りだぞー」

ロビーのドアからタンクトップを着た筋肉質の男が出てきた。ずんずんとかちらに近づいてきてアレスの手をがっしりと握った。

「俺はカールだ。よろしく頼む。ここでは力仕事ができる男が俺しかいないから力仕事全般をやっている。男手が増えてうれしいぞ」

まさに軍人といったような風貌な男はニカッと笑うと握った手をブンブンと振り回した。

「あ、ああよろしく頼む。アレスだ。えーと傭兵をやって各地を渡り歩いている。それでこっちがマキナだ。妹のようなものだ。痛！」

マキナがアレスの足を思い切り踏んづけた。

「妹の！ マキナです。頼りない兄さんの手助けをしております。宜しくお願いします」

「ガッハハ。仲良くていいな。よろしく頼むぜ」

体に似合わず、カールはマキナの手を優しく握って歓迎の意を表した。

「それともう一人いるんだが、体の調子がよくなくてな。ちょっと付いてきてくれ」

アレスとマキナはマリーの後に着いて、ロビーの奥の扉に入った。そこにはベッドに横たわっている老齢の白い口ひげの男がいた。

「テオさん。新入りです。行くところがないらしいのでしばらく置いててもよろしいですか？」

「フ……フーゴ！」

テオと呼ばれた人物はアレスを見ると、何か驚いているようだった。

「？ テオさんどうされました？」

「いや……そんなはずはないな。なんでもない。わしは構わんよ。今はお前がリーダーなんだ。お前がいいと思うのならわしは反対なぞせんよ」

「ありがとうございます。さあ、挨拶しろ」

アレスとマキナは先ほどのような挨拶をした。

「行くところがないと言っておったが、どちらの出身なんだ？」

「ストレガです。訳あってこちらに来ることになってしまいまして、できればそのうちに戻りたいと思っていました」

「あんた達本気で言ってるのか？ この国はな。入るよりも出るほうが大変なんだ。出たいから

ハイそうですかっていう訳には行かないんだ」

「まじかよ。じゃあどうしたらいいんだ」

「私を知るか。だいたいこの国から出たこと無いし。出たっていう人も聞いたことないし」

「まあ、わしがそのうち脱出する方法を探してあげよう。その間ここにいるといい。ようこそ『ベアテ』へ歓迎するよ」

「ありがとうございます。こちらこそ宜しくお願いします」

幸か不幸かアレスとマキナはロゼッタの奇妙な団体の一員になった。果たして、この国から出ることができるだろうか。

第十話「ベアテ」

「しばらくこの部屋を使ってくれ」

マキナとアレスは『ベアテ』という集団の一員となった。しばらくストレガに戻る方法が見つかるまで彼らの一員として活動することとなった。

案内されたのは二階にある六畳ほどの部屋だった。白を基調としたきれいな部屋で大きな窓が二つにベッドは一つしかなく、後はソファと、木の机と椅子が数脚あるくらいだ。

「すまん。あまり部屋数が無いものでな。今倉庫に使っている所を片付けるまでしばらく我慢してくれ。兄妹なのだから共同でも問題ないだろう」

「まあ、兄妹だからな。問題が無いと言えないのだが」

といつつ、アレスはマキナの様子を伺った。マキナは外行きモード発動中なのか、笑顔を崩さなかった。

「私は構いませんよ。むしろ兄さんと一緒にうれしいくらいです」

マキナは異様に冷静だった。アレスは目を合わせて真意をつかもうと思ったが、なかなか目をあわせてくれなかった。ただ、握っていたペンをひねり潰していた。

「まあ適当にくつろいでくれ。お前たちも今日から私達の仲間なのだからな。もう少ししたら夕食だ。用意できたら呼ぶからな。ではな」

マリーが部屋の扉を閉めるとそこには異様な静寂が、この空間を支配し始めた。

「アレス様と同じ空間で同じ空気を吸うなど反吐が出ますね」

「なに……」

外行きモードを解除したマキナが早速アレスを貶し始めた。マキナは床に這いつくばると指で線のようなものを書き始めた。

「いいですか。ここからあ……ここまでは私の領地ですので絶対に入って来ないでくださいね。入ったら最後殺しますよ」

「おい。それだとほとんど俺の分がねえじゃねえか。むしろ、俺が寝るのでぎりぎりじゃねえか」

マキナがアレスに許したのはソファが置いてある分のみだった、後はマキナの領地になるようだ。

「これでも譲歩したほうですよ。嫌なら廊下で寝てください」

「お前、ここでどっち上かはっきりさせたほうがいいかもな」

「望むところです」

さすがのアレスも堪忍袋の緒が切れたようで、腰につけていた剣を抜刀した。それに合わせてマキナも隠し持っていたナイフを抜いた。

「……」

「……」

お互いに一步も動かずに睨み合っていた。どうやら相手がどう出てくるか探っているようだ。その時、どこからか木の葉っぱが飛んできて窓ガラスを打つ微かな音が聞こえた。それを合図に

二人は咆哮を挙げ、お互いに飛びかかろうとした。

「はあああああ！」

「うおおおおお！」

「おい。夕食だ。入るぞ」

その瞬間ドアがノックされ、マリーが入ってきた。二人は瞬時に武器をしまい、手を取り合い乱舞した。

「夕食だぞ。どうした？ 何を二人で踊っているんだ。仲がいいのは結構だが、夕食だぞ」

「命拾いましたね。この決着は必ず付けますからね」

「それはこっちの台詞だ」

そう言いながら、仲良く夕食を食べに食堂へと向かった。



一階にある食堂に入ると他の連中はもう集まって座っていた。食堂には長テーブルが二つ置いてあるだけで他に余計なものがなかった。テオは具合が悪いのか食堂にはいなかった。マリーに聞くと基本彼はいつも食堂ではなく自室で食事を取るとのことだ。

「さあ。食事だ。みんな落ち着けよ」

マリーは大げさに手を広げている。これから何が始まるのだろうか。みんな心なしかワクワクしているように見える。ロゼッタでは基本食料は配給で配られる。裕福な国では無いので食事の質もたかが知れている。それでも食事はロゼッタの人たちにとっては重要な行事のようである。

「お前ら、今日は新入りもいるから肉を用意したぞ！」

周りから歓声が挙がった。どうやら肉が出るのはそう無いことらしい。

「肉なんて久しぶりですー」

「お前ら嘸み締めて食べろよ」

そう言いながらマッチョなカールが席ごとに食べ物を配る。出されたのは、クロワッサン一つと水とどうみても魚肉ソーセージのようなものだ。

「これが肉か……」

マキナなんて肉はどこだと思って周りをきょろきょろしている。肉は目の前ですよ。マキナさん現実逃避しないでください。

「肉だ。久しぶりの肉だあああああ」

マリーなんて涙を流しながら食べている。あの冷静なマリーが取り乱している。

「噂ではヴェヒターのやつらは毎日これを食べてるらしいわ」

とエルナは怒りに打ち震えながら、どうみても魚肉ソーセージとしか見えないものを少しずつ食べている。周りからはなんてやつらだ。許せないなんて声が出ている。アレスからするとこんなもの毎日食べさせられる方が可哀想だと思うのだがと思ったが、黙っていた。

「アレスさん。美味しいですか？」

リリーがつぶらな瞳で聞いてきた。そんなつぶらな瞳で聞かれたらアレスはこう答えるしか

無かった。

「ああ……こんなおいしいもの食ったことねえよおおお」

「よかったです。アレスさんのお口にあったようですね」

アレスはとても言い出せなかった。これが本物の肉で無いことを。それとどこからともなく肉最高一という声が別室から聞こえてきた。テオだろうか。



食事が大分済んだ所でアレスは疑問点を聞くことにした。

「マリー。質問があるのだがいいか？」

「ああ。構わない。答えられることなら答えるぞ」

「ありがとう。お前たちを追っていた奴らはなんなんだ。普通じゃ無かったが」

あまり聞かれたくない話題だったようで、一瞬マリーは顔を強張らせたがすぐにいつものポーカーフェイスに戻った。

「あいつらはな。ヴェヒターと言ってだな。騎士団とは独立していて、反乱分子は無条件に取り締まることのできる権利を持っている組織だ」

現隊長のグスタフが就任してからは、騎士団よりも強い権力を持っているようで、今や手が付けられる状態ではなくなっているようだ。暴行略奪は日常茶飯事で、時には切り捨てることもあるらしい。

「なんでそんなのに追われてたんだ。お前らは？」

「よくぞ聞いてくれました。私たちは！」

「「レジスタンス！」」」

みんな何を思ったのが、いっせいに立ち上がりマリーを中心として思い思いのポーズを取っていた。辺りに微妙な空気が流れたがとりあえずアレスとマキナはぱらぱらとした拍手をすることにした。

「お、おうよ」

「我々の目的はあのロゼッタウォールを破壊し、外の世界に出ることだ！」

「それよりもお前たちは外から来たんだろ？ 外のことを聞かせてくれよ」

「聞きたいです。他の国の人は牛の肉をいつでも食べれるって本当ですか？」

「俺が先に聞く。外の人間は筋肉を増強する薬を使ってお手軽に、筋肉を育てているという話は本当なのか？」

しばらくアレスとマキナは質問攻めに合っていた。それほどに他の国から来た人間が珍しいようだ。



「ふー。疲れた」

部屋に戻ったマキナとアレスはどっと疲れて、ベッドに座り込んだ。同じタイミングで座り込んだので思わず見つめ合っていた。これからやると言ったら一つしか無い。無言の緊張が二人の間に走った。

「アレス様。覚悟はよろしいですか？」

「あ、ああ……」

「はあああああ」

「うおおおお！」

二人はお互いに拳を握りしめ咆哮した。

第十一話「ベアテの人々」

「じゃんけんぽん」

「勝ったー。私が勝ちました。私がベッドーです。にやり」

「畜生。チョキなんて出すんじゃねえよ。ていうか、三回勝負だろ。普通」

「私の勝ちです。ではおやすみなさい」

「おい。こら。待て」

マキナは勝手にベッドに潜り込んだ。駆け寄るともうすでに眠りに入っていた。なんて寝付きのいいヤツだ。これからの運命を決めるじゃんけんで敗れたアレスは泣く泣くソファで寝ることになった。アレスはあまり寝心地がいいとは言えないが仕方がないのでやけに柔らかいソファで我慢することにした。屋根がある所で寝られるだけで十分だ。贅沢など言ってもらえない。

アレスはソファに寝そべりながら考えていた。成り行きでここまで来たが大変なことになった。マリーはこの国から簡単には出られないと言っていたが、本当なのだろうか。まあしかし、アレスは国を追われた身なので今更帰る場所などない。まあなんとかなるだろうと思っているといつの間にかに睡魔に襲われていた。

◇

「やっぱり少し体が痛いな」

「起きたか。早いな」

朝、アレスが眠気覚ましに外に出てみると、マリーがいた。

「昨日はよく眠れたか」

「ああ、十分だ。野宿に比べたらどうってこともない」

「そうか……確かにそれはそうだな」

そう言うとマリーはしばらくロゼッタウォールの方を見つめていた。ストレガに居た頃はあまり意識していなかったが、こう改めて見ると何ともいえない気持ちになる。ロゼッタの住人は鳥かごに入れられた鳥だと言われているらしいが確かにその通りだ。多くの人がここで生まれここから一歩も出ることが無く、亡くなるらしい。それはどういう気持ちなのだろうか。マリーのあまり表情の少ない横顔を見ながらそんなことを思った。

「悪いが、ちょっと散歩に付き合ってくれないか」

「構わないけどどこまで行くんだ？」

「ちょっとそこまでだ」

マリーが指を指した方向はロゼッタウォールしかなかった。アレスは黙って着いて行くことにした。

◇

アレスはマリーに連れられてロゼッタウォールのすぐ目の前まで来ていた。近くに寄るとその大きさがよく分かる。本当に立ちはだかるような壁だ。あまりの巨大さにアレスは圧倒されていた。これを乗り越えようと思っているマリー達の心の強さはものすごいものと思った。ここに来るまでにロゼッタのことをマリーに簡単に教えてもらった。

ロゼッタはかつて、大陸一の騎士団を持っていた。軍事力で一番の国家であり、それに慢心した王は国に壁を建設し、全てをコントロールしようとした。食料は週一回の配給のみとし、国外にはよほどの理由が無い限りでることはできなくなったこと。それに不満を持った革命団を初めとするレジスタンスが数多くでき、抵抗し、亡命を企てたが、誰一人として成功するものはいなかったことをマリーから聞いた。

「それにあれを見てくれ」

マリーが示した先には建設中の壁があった。まだロゼッタウォールを作っているようだ。

「ここはだな。貧民街と貴族街との境目なんだ。やつらは貧民街と貴族街との境目にも壁を作り、さらに我々を囲おうとしているんだ」

悲痛な顔のマリー。アレスは何も言うことができなかった。

「勝手に店を出してんじゃねえぞ。おい！」

「や、やめてください」

そこにヴェヒターと見られる制服の男が、花屋の露天を蹴り飛ばしていた。アレスは助けに出ようと身を乗り出しかけたが、マリーに止められた。

「手をだすな。面倒なことになる」

「こんなこといつもあるのか」

「ああ。あいつらは私たちのことは何とも思っていない。だからああいう真似ができるんだ」

申し訳なくは思ったが、アレスとマリーは巻き込まれないようにそこから距離を取るために移動した。

「遅くなったが助けてくれてありがとう」

「いや。俺達も行く所が無かったから。こちらこそ礼を言うよ」

手を差し出すアレスだったが、思わぬことに顔を赤くするマリーは手を取ることに躊躇していた。

「どうした？」

「い……いや。こちらこそありがとう」

マリーはアレスの手を両手で包んで、顔を赤らめながらアレスを見つめた。アレスは急に気恥ずかしくなって目を逸らした。

「そ、そろそろ戻ろうか」

「そ、そうだな」

戻るとにやにやしているエルナに出くわした。

「逢引ですか？」

「ち、違うぞ。断じて違うぞ。この国がどんな国なのか案内してただけだ」

「ほんとーですか？」

「ほ、本当だ。なあアレス？」

「残念なことに本当なんだ」

「それでどちらから誘ったんですか？」

「私からだが、それが何か」

「ほおー。へえー」

何か思うことがあるのかエルナはマリーの顔をじろじろと見始めた。

「な、なんだ」

「いやー。珍しいこともあるもんだなと思ってね」

「どうだっていいだろう。私は先に入る。アレス付き合ってくれてありがとう」

「あ、ああ」

どかどかと入っていったマリー。

「ねえ。マリー本当の所どうなの？」

「ああ、何か疲れた。もう一回寝よう」

◇

そのころストレガ国内。

「ソフィア様報告があります」

オットーが珍しく慌てていた。

「何！ 忙しいんだけど」

クロスティーニからの再三のアレスとマキナの引渡し要請にほとんどソフィアは参っていた。

国外追放にしたのだがいつまで誤魔化せるか分からない。

「アレスとマキナの消息が不明になりました」

「え？ もう一回言って」

「ごほん。アレスとマキナがロゼッタ入国を最後に消息が不明になりました。ロゼッタ国内の組織に追われてその後、見失ったそうです」

「だから言ったのよ。ロゼッタは止めなさいってどうするのよ！」

「ロゼッタの国内情勢を考えますととても探索が難しく……」

「そんなこと聞いてないわよ！」

思わず、怒りでソフィアは机を叩いていた。

「ソフィアちゃん何を怒ってるの？」

姉のクレア大臣がいつの間にか部屋に入ってきていた。ソフィアは姉の顔を見て、嫌な気分になっていた。マキナがロゼッタに送られたのはそもそもは姉さんが作ったあのオモチャが原因だとソフィアは思っていた。姉さんは最近あのオモチャにご執心で、しょっちゅうマルサラに出かけてはあのオモチャの改良をしている。それがソフィアにとっては気に入らなかった。

「私探しに行くわ」

「お止めください」

「アレスはどうでもいいけど、マキナは私にとっては家族同然な子なの。探しに行くわ」

「そんなことより、アマーロとマルサラが戦争を始めたよ」

「まさか？」

「本当だよ。ストレガも中立だとはいえ、油断できないよ」

姉のクレア大臣は笑ってはいるが目は笑ってはいなかった。今気がついたが、姉さんが何も用が無いのにソフィアの部屋に来るわけが無かった。何か重大な話があるに違いない。

「ストレガもいつまでも国王不在の訳に行かないね。ここでお父様の遺言を読み上げることにするよ」

「やはりあったのですか。ジェラルド国王の遺言が」

「姉さんなぜ隠していたのですか？」

「この遺言の意味するところが今分かったの。ごめんね。今まで隠していて」

クレア大臣はスカートのポケットから一枚の白い紙を取り出すと静かに読み始めた。

「全ては……」

◇

ソフィア達がそんなことになっているとは思わず、アレスはカールと戯れていた。

「新入りの兄ちゃん勝負だ」

アレスはベアテの力仕事担当であり、筋肉自慢のカールに朝の水汲み勝負を持ちかけられていた。

「兄ちゃんよ。俺と水汲みで勝負しな」

「なんで俺がこんなことを」

「するのか、しねえのか！ どっちだよ！」

アレスの耳元で叫んだので、アレスの鼓膜が破れそうになった。

「わ、わかった。するよ」

「よーし。それでこそ男だ」

「いくぞ。うおおおおおおお！」

カールはものすごい勢いで坂を駆け上がっていった。水汲みのタンクも持たずに。

「あいつ何しにいくんだ」

「さあな」

近くで様子を見ていたさすがのマリーも呆れていた。

◇

一方マキナはエルナの洗濯手伝いをしていた。今や野良メイドになってしまったが、掃除洗濯、アレスを罫にはめることだけはプロ級のマキナは何やら揉めていた。

「私に箒を持たせたら私の右に出るものはいない」

「ふふふ。まさか私にそんなことを言う人が居るなんてね」

エルナは自慢の栗色の髪を掻きあげた。

「どちらがこの廊下をよりきれいにするか勝負よ」

「望むところです」

鼻がくっつきそうなほどの至近距離で見つめ合った。このロゼッタで最強掃除人対決が今始まろうとしていた。変な戦いが始まったが、アレスは興味がなかったので、即座に去った。勝手にやってくれ。

◇

やる事が無くなったアレスはアパートの裏の畑に行ってみることにした。昨日リリーに良かったら畑に遊びに来て欲しいと言っていたので、せっかくなので覗いて見ることにした。

アレスが裏手の畑に回ると、銀色の髪を揺らしてリリーはせっせと畑仕事をしていた。

「リリーちゃん来たよ」

こちらに気づくとリリーはうれしそうに微笑むと、とてとてとこちらにやってきた。

「アレス兄さん来てくれたんですか？ ありがとうございます」

「何育ててるの？」

「大豆です。やっとなさやが大きくなって、秋には収穫できますよ」

大豆か。畑の牛肉とよばれているが、この国の人達の肉に関する執着は並々ならぬものがあるなとアレスはふと思った。本当の肉を見たらどう思うのか恐ろしくも思った。そんなことを思っていると隣でリリーは歌い出した。

「なにしてるんだ？」

麦わら帽子を被ったりリリーが首をかしげている。

「知らないんですか？ 歌を聴かせるとよく育つんですよ」

ロゼッタの民族音楽なのかわからないがやたらとハードな曲調で結構リズムが早かった。踊るような勢いで気がつくともリリーは踊っていた。

「大豆に聴かせるには結構激しいんだな……」

「こういう曲調の方が強い子に育ちそうじゃないですか」

逆に毒を持って育つか、逆に腐ってしまのでは無いかと思った。

「大きくなーれ。大きくなーれ。さあアレス兄さんも一緒に」

「あ、ああ。オオキクナーレ。オオキクナーレ」

「アレス兄さん声が小さいです。もって気持ちを込めてください」

「お、おう」

リリーのあまりの迫力にアレスは圧倒されていた。相変わらずアレスのことを兄さんと呼んでいた。実は昨日こんなやりとりがあった。



昨日の夕食中。

「あの……」

リリーがおずおずと話しかけてきた。リリーは引っ込み思案に見えて実は人懐っこいようだ。

「どうした？」

「大変、恐縮ですが、アレス兄さんとお呼びしてもよろしいですか？」

ちょっとどうかと思ったが、別に嫌ではなかったのので了承することにした。

「ああ、構わない。好きに呼んでくれ」

「ありがとうございます。兄さんはカール兄さんしかいなかったの、うれしいです」

「マキナちゃんもよろしくね」

「なぜ、私だけちゃん付け!？」

「リリーよりも年下ですよ？」

「私は兄さんより一つ下だ！

「ごめんなさいです。リリーとあまり身長が変わらないので同い年か下くらいかと思いました。

残念です。妹ができるかと思いましたが」

泣きそうなリリー。アレスから見ればどちらも変わりがないような気がする。

「おい。何泣かしてんだよ」

「わ、私はそんなつもりじゃ」

「リリーちゃん。大丈夫だ。こいつは精神年齢が五歳くらいだから、妹と思っても構わないぞ」

アレスは思わず頭を撫でてやっていた。

「ぐすん。ありがとうございます。優しいアレスさんは好きです。いじわるなマキナちゃんは嫌いです」

「え、ちょ、ちょっと」

「マキナちゃんって呼んでもいいですか？」

「仕方がないですね。特別ですよ」

「マキナちゃん、よろしくね」

「は、はい。宜しくお願いします」

どうも腑に落ちないマキナであった。



そんなことがあってアレスはアレス兄さん。マキナはマキナちゃんと呼ばれることになった。ちなみにマリーはマリー姉さん。エルナはエルナ姉さん、カールはカール兄さんと呼ばれている。リリーは兄さん、姉さんと呼びたいようだ。マキナは例外のようだったが。リリーは不思議な踊りを踊りながらその合間に大豆に向かってお辞儀をしていた。何かの儀式なのだろうか。傍から見ると異様な光景だ。

「ま、まあ頑張れよ」

「はい！ 頑張るです」

アレスはリリーの歌を聞きながら畑の側に寝っ転がって寝ることにした。

◇

いつの間にか夕方にさしかろうとしていた。飛び起きたアレスはアパートに戻ることにした。

「どう！ この輝き私の勝ちに決まったわね」

「エルナさん甘いですね。輝きにこだわっているようではまだまだですね。私は完全に抗菌と防臭をしました。顕微鏡で見ればはっきりと分かるでしょう。雑菌の少なさにです」

「まさか。そんな」

エルナとマキナはまだほんとうにどうでもいい勝負をしていた。まあ友達が少なそうなマキナに仲の良い友達ができ、仮とはいえ、兄として少し微笑ましかった。夕食まで少し時間がありそうなので再び外に出ることにした。

外に出ると、マリーが素振りをしている横で、知らない人物と話をしていた。全身黒ずくめでフードを深々と被っている怪しい男だか、女だか分からない人物だった。

「ありゃありゃ。珍しいわね。外部から人間がやってくるなんて。あらあなたまさかね」

こちらに気がつくとその声からして女だと思われるフードの人物はアレスの方をじっと見つめてきた。

「またくるわ。毎度」

しばらく見つめるとその人物はあっさりと去っていった。

「なんだあいつは」

「武器商人です。ベアテの武器は全部彼女から購入しています」

「へー。なんだか変わったやつだな」

「アレス程では無いですよ。はっはは」

「そこ笑う所では無いだろ」

「失礼。悪気は無かったんだが、気を悪くしたか」

「いや、別にそれより……」

そこに慌ててカールが飛び込んできた。余程慌てていたのか、両手にバケツを持っている。もう水汲み勝負は終っただろうに。

「みんな大変だ！ 食堂に集合してくれ！」

カールに押されるように食堂に集合すると、みんな食堂に集まっていた。いったい何があったのだろうか。緊張した面持ちのみんなの前でカールは呟いた。

「食料が底をついた……」

「「「ええ！」」」

第十二話「食料確保作戦」

「食料が底をついた……」

マッチョなスキンヘッドのカールは自分の頭を撫でながら言った。

「「「ええ！」」」

「大変だわ。食べ物が無いわ」

みんなあたふたしだした。

「もう終わりです。リリー達は餓死するしかないんです。最後にお肉食べたかったです」

銀髪の幼女リリーは空を仰いでいる。エルナはそんなリリーをあやすように大きな胸で抱きかかえた。

金髪のマリーは食堂の椅子に座って放心状態に陥っていた。みんな軽いパニックに陥っていた。

「みんな落ち着け。大事なことを忘れてるぞ！」

カールが叫んでいるが誰も聞いていないようだ。事の重大さがわからないアレスとマキナは、何かと思いながら、ベアテのみんなの様子を伺っていた。

そこに白髪のテオが白い顎髭を揺らしながら入ってきた。一瞬にして注目がテオに集まった。

「……みなさん、安心してください……」

「テオさん」

「……食料は……いつものように確保して……います。明日にでも……取りに言って……ください」

そう言うとテオは部屋に引っ込んでいった。

「さすがテオさん！」

みんなから歓声があがる。お祭り騒ぎだ。

「それで今日のご飯は？」

「あ？」

先ほどのお祭り騒ぎも一瞬で終了して、その場が凍りついた。その日はリリーの畑できゅうりを取ってきてみんなで泣きながら食べた。

◇

翌日。

朝一番マリーはアレスに呟いていた。

「アレスがいて助かるよ」

「何がだ」

ばしばしとアレスの肩を叩く、マリー。少し痛い。

「いやー。本当に助かるよ」

「だから何がだ」

「アレス兄さん。本当に助かるです」

どこからかりリーが出てきて抱きついてきた。

「ふふふ。アレスさん男冥利につきますね」

エルナが隣に座ってきて妖艶に撫でる。

「がっはは。まあいいから来い」

カールに腕を引っ張られ、外に連れ出された。

「見ろ！」

「これは……台車？」

「そうだ。それでお前は俺と一緒にこの台車を引っ張って山に登るんだ」

「すまん。俺、死んだ親父に台車だけは引っ張るなって言われてるんだ」

「マキナさん。お父さんは？」

「生きてますよ。今頃バリバリ肉を食べていると思います」

思わずマキナを睨んだ。こいつ俺のことを嵌めようとしている。マキナは周りに気付かれないように邪悪に微笑んでいた。マリーに詳細を聞く所によると、昨日の一件で食料が無くなったので取りに行くことになった。その食料を載せるためにカールとアレスとで木の台車を引いて裏の山を目指す。

基本的にこの国は配給制なのだが、レジスタンスは配給を受けていないので大所帯レジスタンスの革命団から定期的に食料を分けてもらっている。革命団は数千人と言う人数を率いているレジスタンス最大の組織だ。

他の小規模レジスタンスの面倒も見ているので、ベアテも色々な面でお世話になっている。その最たる所が食料だ。革命団は独自のルートで大量の食料を確保しているのもそれにお世話になっているレジスタンスも多い。

テオの友人が革命団に所属しているので、食料は革命団から譲ってもらっている。

「さて……たまには……わしも行くかな……今日は調子がいいし」

「やったー。テオ爺と一緒にです」

いつもは同行しないテオが今回はなぜか同行することになったので、リリーは喜んでいて、テオの首に巻き付いてテオを困らせていた。

アレスとカールが一台ずつ木の台車を引くことになったのだが、引っ張ってみると意外と重かった。これで山を登るといのでアレスは気が滅入った。

「兄ちゃんよ。どちらが早くこの山を登るか勝負だ！」

「え？ お、おい」

「置いていくぞ！ うおおおおお！」

カールはものすごい勢いで台車を引きながら登っていった。

「……目立ちすぎじゃないか」

「いつものことだ。気にするな」

マリーは至って冷静だった。ただ、新しい食料がもらえるのが嬉しいのか先ほどから立ったり座ったりしてそわそわしていた。

「まあ。ゆっくり登ればいいだろ」

「兄さん。私具合が悪いので台車に載せてください」

「ずるいです。リリーも乗ります」

「では私も」

「……すまん。横にならせてもらう」

みんななぜかアレスの台車に乗り出した。馬車じゃねえぞ。これ。

「お前ら降りろや。エルナも何とか言ってくれ」

「私も急に立ちくらみが……ふふふ」

最後の良心だったエルナまでもが乗り出した。

「お前らしっかり捕まってるよおおお！！」

カールに負けないスピードで台車を加速させた。戦争になれば甲冑を着て戦場に出るんだ。これくらいでへばっていてもたまるか。アレスは力強く地面を踏みしめ、心のなかのギアを入れた。

「お、おい。アレス少し早すぎじゃないか」

「任せろ。すぐに登り切ってみせる」

「いや、そうじゃなくてだな」

「そっちは崖だああああ！」

「しまったああああ！ ブレーキ！！」

アレスは足で踏ん張って止めようとしたのだが、あまりにもスピードを出しすぎていたので、あっさりと足を取られて、そのまま崖から転落した。

◇

崖の下は川だった。アレスを始め他のメンバーも川に転落し、川に流されていった。

「うわっぷ。駄目だ。流される」

「アレス兄さんー！」

「俺に掴まれ」

「あ、あー。兄さん」

「流されますー」

「アレス、リリーは頼んだぞ」

なんとかリリーは助け上げたのだが、他の連中は流されて行ってしまった。

◇

「はあ……はあ。なんとか生きてるな」

びしょ濡れになりながらもなんとかリリーと一緒に河原にたどり着くことができた。

「リリーちゃん大丈夫か？」

「リリーは大丈夫です。アレス兄さん。助けて頂き、ありがとうございますです」

「いや。悪いのは俺だからな。少し調子に乗りすぎた。それよりも……」

他の連中はどこまで流されていったのだろうか。無事だったらいいのだが。

「グオオオ」

「ア……アレス兄さん？」

「どうした？ リリーちゃん」

何かに怯えているようでリリーはアレスにしがみついていた。リリーの見ていた方向を見ると、なんと巨大な熊のようなものがいた。ただの熊ではない。ビルの二階ほどもある巨熊だ。大きすぎるし、手の爪がバルログ級のかぎ爪で、なぜか胸にプロテクターをつけている。腕にはリングが巻かれており、『まさお』と書かれていた。誰かの飼い熊だったのだろうか。まるで異世界に迷い込んでしまったようだ。

「グオオオ」

「アレス兄さん……怖いです」

「リリーちゃん。俺に任せろ。必ず生きて合流するぞ」

「グオオオじゃねえぞ。グオオオオオ！！！！今日は熊鍋だああああ！」

アレスは剣を抜き、まさおに切りかかった。まさおは戦い慣れているのか、長いかぎ爪でブロックした。

くぐり抜けて切りつけてもプロテクターにはじかれる。

「なんという防御力だ。でもここで熊なんぞに負けるわけにはいかねえ」

アレスの剣とまさおのかぎ爪の打ち合わされる金属音が断続的に山に響き渡った。アレスとまさおは互角に渡り合った。ただ、熊のまさおの方が力の強さは上のようで段々とアレスは押されていった。

「いかん。昨日きゅうりしか食べていないから力が入らねえ」

しかも、アレスは腹が減っていつもの力が出せずにいた。アレスは誰が見ても劣勢のようだった。その時、リリーが叫んだ。

「アレス兄さん。リリーにらせてくださいです」

「なんだって？」

そう言うとりリーはまさおに向けて手をかざしたかと思うと、強烈な光を手から放出した。

「グオオオオオ！」

その光を浴びたまさおは動きを止めて固まっていた。

「リリーちゃん……これは？」

「今です。アレス兄さん」

「分かった。まさおよ。お前に恨みは無いが、俺のために鍋になってくれ」

「アレス兄さん。それは可哀想です。動けないように傷めつけてくださいです」

「わ、分かった。そうするよ」

それはそれでひどいのではと思ったが、リリーが切実に訴えるので、アレスはそれに同意し、殺さず、ひどい目に合わせることにした。動けないところをアレスは剣でタコ殴りにした。

たまらず熊のまさおは崩れ落ちて動かなくなった。

「やった。アレス兄さん。さすがです」

「いや。ほとんどリリーちゃんのお陰だろ」

「いえ、リリーなんかこんなことしかできないのですので」

「しかし、リリーちゃんのその力はいったい？」

「グオオオ」

リリーから先ほどの不思議な力の理由を聞こうとしたら、熊が急に起き上がった。アレスとリリーは身構えたが、熊が仲間になりたそうに見つめているのでアレスは熊のまさおを仲間に入れてやることにした。アレスは熊を屈服させ、タイムすることに成功した。

熊はアレスとリリーを肩に乗せてくれた。どうやら俺たちを運んでくれるようだ。

「さっきのリリーの力ですけど……アレス兄さん。気持ち悪いですか？」

「そんなことないよ。リリーちゃん。助かったし、こんな可愛いリリーちゃんのことを気持ち悪いななんて思うことなんてないよ。どうしてそんなこと思うんだ？」

「でしたらいいんです。アレス兄さんありがとうございます」

リリーは安心したようにアレスに向けて微笑んだ。そんなリリーの顔を見て、アレスは心穏やかな気持ちになった。

◇

その頃、別な河原に流れ着いたマキナとエルナとマリーは変わったイノシシと戦闘状態に陥っていた。

そのイノシシは口からはみ出す牙に加え、カモシカのような鋭利なツノが生えている。前足にはリングが嵌められていて、『花子』と刻んであった。

「マキナさんお願いします。私、頭脳担当なので」

「え、ええ」

「妹さん。私は小石で援護射撃しますから前衛を頼みます」

「全く、お客さんの私に戦わせるなんて、後で高くつきますよ。エルナさんとマリーさんの今夜の夕食の肉は私のものですからね」

他の二人が頼りにならないので、マキナが戦うことになったのだが、今、マキナが持っている武器は懐に隠していた武器のナイフしかなかった。

「今日はイノシシ鍋。これ一択、しか無い」

決意を新たにしてマキナは花子に戦いを挑んだ。

◇

「無理、無理あんなの無理」

「頑張ってる。私、イノシシ鍋食べたこと無いの」

「妹さん。気合が足りないぞ」

マキナはイノシシの花子に翻弄されていた。さすがのマキナも獣とは戦ったことはないので、

あまりの花子の予測不可能の動きにどんと体力を削られていた。

「やっぱりきゅうりじゃ。力がでないよー！」

アレスと同じくマキナもきゅうりでは力が出ないようで、マキナにしては珍しく体力切れを起こしていた。マキナ達が苦戦している所に、頭にバンダナを巻いた男が現れた。そのバンダナの男は数人の集団を率いてマキナ達の助けに入った。

「嬢ちゃん達大丈夫かい？」

「エドガーさん」

「誰ですか？」

「革命団の団長、エドガーさんですよ」

革命団の人たちは瞬く間に、イノシシの花子を倒した。

◇

なんとかアレス達は革命団との合流先に到着した。

「おお……遅かったな」

テオは流されていたかと思ったが、先に合流先にいた。

「兄さん遅いですよ」

「全くだ。私達を待たせるとはとんでもない男だ」

「ふふふ。アレスさん言われてますね」

しかも、マリー達も先に着いていた。アレスたちが一番遅かったらしい。

「なんだ。その熊は？」

「ああ。まさおだ。まさお挨拶しろ」

「グオオオオ！」

「いや。そういうことではなくてな」

「なんででしょうかね？」

「いや。もういい」

「アレス。この人が革命団の団長。エドガーさんだ」

「アレスです。宜しく申し上げます。それでこいつが妹のマキナです」

「妹のマキナです」

「エドガーだ。よろ……」

そこで革命団の団長のエドガーが、アレスを見て驚く。

「テオさん。こいつか？ 確かに瓜二つだな」

「ああそうじゃ。まさかこんな形でとはな」

アレスのことを見て、テオとエドガーは何事か話している。確か、アレスがテオに初めて会った時と印象が似ているがどういうことなのだろうか。

「あの……どういことですか？」

「まあいい。食料だ。受け取れ。お前らこれは貴重な食料だからな。大切に食べろよ。それと

マリー」

エドガーはアレスの質問をスルーして、マリーに話しかけた。

「なんだ？」

「今度の作戦にはベアテにも参加してもらうからな。前のように行かないからな」
威圧的な態度のエドガーに、さすがのマリーも少々癪に障った表情をした。

「ああ。分かっているよ。今度は参加させてもらう。前金も貰ってるしな」

そう言ってマリーは貰ったばかりの食料の山を見つめた。

「頼むぞ。今度の作戦で終止符を打つつもりだからな」

「ヒッヒヒ。見つけましたよ」

「ヴェヒター！」

この間のグスタフ率いるヴェヒターが、懲りずに張っていたようだ。グスタフは爬虫類を思わせるような、気持ちの悪い顔を更に歪ませて言った。

「いけませんね。いけませんね。こんな所で食料の分配など」

「なぜバレた？」

「どうやら……派手に騒ぎすぎたようですね」

「行け。熊よ！」

アレスは先ほど手名付けた熊のまさおを放った。

「な、なんだこの熊はああああ！」

「今です。逃げましょう」

まさおにヴェヒターの相手をさせている間に、アレス達は食料を積んだ台車を引っ張って、山を駆け下りることにした。だが、しばらく走った所でテオが苦しそうにうずくまっていた。

「テオさん大丈夫ですか？」

「ええ……お気遣いありがとうございます……私なら大丈夫です」

テオの顔は真っ青だったが、頑張ってもらうしかないが、アレスはこのままテオが自力で下山するのは無理と判断した。

「テオさん。おぶります。乗ってください」

「すまないな……」

「では私はここで失礼する。ではまたな」

エドガーは仲間と他のルートに行った。

「私達も全力で下山するぞ。お前たちも遅れずに着いてこい」

マリーが初めてリーダーシップを取り、先行してみんなを導くため走った。アレス達はマリーについて行き、なんとか下山することに成功した。

ただ、アレスはエドガーの反応が気になっていた。聞いてみたのだが、アレスの質問はエドガーに流されてしまった。アレスはエドガーにもテオにも初めて会ったはずなので、あの反応はどういうことだろうか。

とにかくマリー達は念願の食料を手にした。エドガーに注意されたにも関わらず、マリー達はこれまでの分を取りもどすかのように、馬鹿みたいにその夜は食べに食べた。みんな今まで生き

ていた中で一番幸せな顔をしていたし、実際口にもしていた。ただ良いことは続かないもので翌日、テオの具合が悪化した……。

◇

その頃、ストレガでは、クレア大臣がくちゃくちゃの髪の毛をさらにくちゃくちゃにして、落ちそうになる黒縁メガネを上げながら、ジェラルド国王の遺言状を読んでいた。

「それだけ？」

ストレガのジェラルド国王が残した遺言状には一言だけしか書かれていなかった。それが。

「全てはオットーに一任する」

という文句だけだったのだ。

「本当にそれだけしか、書いていないの？」

ソフィアはひったくるようにブロンドの髪を翻して、遺言状を奪い、まじまじと穴が空くほど見つめた。

「本当にそれだけだわ。何これ。どういうことなのオットー？」

「……」

責めるようなソフィアの質問に、オットーは腕組みをして、無言で俯いていた。

国王の片腕だったオットーに丸投げするような一文だが、オットーはかねてより、国王より自分に万が一のことが起こったら、どうすればいいかということを知っていた。

この遺言により、その後、ストレガはソフィアを国王にして、体勢を固めることになった。